
幻妖帝国～アキロの章・紅き涙は迷霧の彼方

暁さくや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻妖帝国「アキロの章・紅き涙は迷霧の彼方

【Nコード】

N2107E

【作者名】

暁さくや

【あらすじ】

幻妖帝国・グリウスの章の続編。グリウスを妖獣の国シェバから解き放ったウエルとシャオンは再び旅に出た。しかし、隣国アキロで待ち受けていたのは、恐るべき罠だった。本当の敵は誰なのか…
…ウエルとシャオンの絆が試される時が来た！

第一章・燃ゆる炎の紋章…… 1（前書き）

これはグリウスの章の続編ですが、単独でも読めるようになっていきます。ヨウーワ大陸へ旅立って、楽しんでいただければ幸いです。

第一章・燃ゆる炎の紋章…… 1

薄闇の中で蠟燭ろうそくの火影が揺らいだ。

一本ではない。二つの直線を描くように一定の間隔を置いて立てられている。蠟燭の揺らぎは、真つ直ぐに奥へと伸びていた。

広間の窓には暗幕が張られ、わざと光が遮られている。一閃の光すらも許さぬ厳重な暗幕の張り方である。

上を見上げれば天井は高い。弧を描くように天を覆っている。そこには目を見張るよう

に艶やかで緻密な彫刻が施されているが、今は闇に包まれてそれも定かではない。

一切の光源が除去された広間に燃える蠟燭の炎は、さらに闇を深くしているようでもある。

闇の中には生き物の陰鬱とした気配だけが充満していた。

ぽつぽつと灯る明かりの中に、整然と沢山の人間が額を擦りつけて祈るように平伏しているのである。

ざつと四、五十はいる。

ひれ伏す者達の重苦しい息遣いだけがそこにある。誰も言葉を発せず、誰も顔を上げようとしない。

中央部分には、ちょうど人が一人通れるだけの隙間が出来ている。そこを、長い板を持った者がゆっくりと歩いてきた。

板の前と、後ろを、一人ずつで支えている。いずれも、黒い服を身にまとっていて、広間の闇に溶け込んでしまったかのようなだ。

歩く者の気配で、蠟燭が入口に立つものから順に揺らいでいく。板の上には、黒衣の女が横たわっていた。女は死んだようにぐっ

たりと横たわっているが、豊満な胸は静かに上下している。

黒衣の者達が、平伏す者達の間をゆっくりと進んでいった。

彼らの前方、広間の際奥には鷲のように大きな鳥の像が安置されている。

黒い翼を大きく横に広げ、くちばしを大きく開けていた。そこから今にも甲高い奇声が轟きそうにも思えた。

ただ、瞳が生きているかのように妖しく金に輝き、ちろちろと鋭い眼光を放っていた。

体長は大人の腰の辺りまではある。

黒衣の女は板の上に寝かされたまま、その鳥の象の前に横たえられた。

ひれ伏す者の中から、啜り泣きのような声が漏れ出ではじめる。

地の底からのうめき声のように、喉の奥で押し殺したかのような声だ。

示し合わせたかのように、一人、また一人と、広間を後にしていく。

黒衣の女と鳥の像だけが、蝋燭の炎の揺らぐ広間に取り残された。そこを静寂だけが支配する。

黒衣の女の息遣いすらかき消し、体の芯を凍えさせて震え上がらせるほどの薄気味悪さが、広間には漂っていた。

だが、それも長い時間ではない。

人の気配や動きのない空間で、蝋燭の炎がゆれた。まるで人が通ったように、広間の入口からぼつぼつと立てられた蝋燭が一本ずつ揺らぎ始めたのである。

無論、窓や扉は開いてはいない。

黒鳥の前に横たえられた女の近くにある最後の蝋燭が燦った。

同時に、黒鳥の像から影が陽炎立つ。二重に折り重なるようにして現れた影は、次第に黒鳥から離れて独立していった。

仄暗い闇の中に現れた、さらに濃い闇の影。それは黒鉛が空を覆うが如く立ち昇り、生き物のように意志を持って女の方へと移動した。

聴覚が冴え渡り、存在するはずのない音が聞こえたような錯覚を覚えそうなほど、物音は一つもない。

重くまとわりつく、生暖かな湿気を含む空気が女に降りてきたよ

うであつた。

饅えて錆びた臭いが喉にこびりつき、粘膜を溶かしながら体になだれこんでいきそうな強烈な臭い。

黒い影は、そろりと広間の床をつかんだ。

漆黒の闇から、徐々に濃緑色の皮膚が現れる。

足の爪がギリリと床に傷をつけるほど長い。人間の足である。けれど指は三本だ。

股は外に大きく開いている。人間の股関節とは到底思えない。背はゆるく弧を描き丸まっていた。その背には、やや淡い濃緑色の羽が折りたたまれている。

広い肩幅からは同じく人間の腕が生えている。だらりと下がった腕の先は手首ではなく、闇を照り返す長い爪のついた利鎌とがまのような形をしていた。鋸のこぎりに似た鋭い歯が並んでいる。

太い首の先には、逆三角形をした、まさしく蠅螂かまきりの頭が付いているのである。

頭の先に伸びる長い触角を動かして、大きく丸い闇を映す複眼をちろりと女に向けた。

黒鳥の金の瞳が、蠅燭の炎を受けて妖しく揺らめいた。

第一章・燃ゆる炎の紋章…… 2

男が足元に転がる小石を乱暴に蹴り飛ばした。

「つまらねえ」

忌々しげに舌打ちして、さっき蹴った小石を今度は力任せに前に跳ね上げる。石は大きく弧を描いて遥か遠くまで飛んでいった。

フードの付いた黒い外套が風を切って軽やかにはためく。フンと鼻を鳴らすと、肩からずり落ちた大きな袋を担ぎなおし、両手を頭の後ろで組んだ。

髪は短く黒い。顔の左半分を黒い布で覆っている。顔の半分ではあるが、目鼻立ちははっきりとしていて、右側に覗く黒い瞳は炯炯とした光を宿していた。

腰には長剣が下がっている。

「あーあ、つまらねえっ。仕事もねえしなあ。何事もねえと、妙に血が騒ぐんだよ」

黒髪の男の口が拗ねたように歪んだ。

「困った性分ですね、シャオンは」

数歩後ろを歩いていたもう一人の男・ウェルが、ゆったりとした丁寧な口調で返す。まるで神殿で講和を説く神官のように落ち着いていて淡々とした声音だ。

シャオンと呼ばれた黒い髪の男とは正反対で、背の半ばまである長い髪は黄金に輝き、黒い外套によく映えた。まるで光を受けて、金の粒子が零れ落ちてゆくかのようだ。瞳は青く凜としているが、口元にはわずかばかりの笑みが湛えられていた。その笑みが、目元の涼しさとは裏腹に男を柔らかな雰囲気に見せている。ほっそりとした肢体は、後ろから見れば女とも見紛う。

彼の美貌には道行く者が必ず振り返っていく。それほどの端整さだ。

「何か退屈だと不都合がありますか」

「おおありだね」

「斬りあいでもしたいのですか？」

「そういうこと言ってんじゃねえのよ、ウエル」

「では何がしたいのです？」

「だからそういう意味でもねえって」

「だったらどういう意味なのです？」

「だから　ああっ！　もういい……」

不毛な問答に辟易したかのように息をつくと、仄かな笑みを絶やさないうエルに対して、シャオンは白い歯を剥いてから背を向けた。いつもそうだ。

シャオンは口ではウエルに敵う事はない。

また頭の後ろに両腕を当てて、時おり小石を蹴りながら歩き出す。ウエルもその後ろを、口元にわずかばかりの笑みを残したまま歩いて行く。

彼らの歩く道は真っ直ぐに伸びている。

辺りに集落は見当たらない。

右側は手入れされた畑が広がり、作物がたわわに実っていた。左側では麦の穂が実をつけ、重みでしだれる一面の畑であった。

果実に傾いた陽の光が影を作り始めていた。時おり吹く風が、歩き疲れた体を癒していく。それが果実と麦の穂を揺らし、さわさわと耳に心地よい音楽を奏でていた。

「日が暮れてきたんじゃねえか」

「そうですね」

「早く宿を探さねえと」

「別に夜空を眺めながら眠ってもいいですが」

「冗談言ってんじゃねえよ」

「なぜ冗談だと思うのです？　たまには外の空気もいいものです」

「襲われたらどうすんのよ」

「襲われるはずがありません」

ゆつたりとした口調と早口で粗雑な口調が言い合う合間にも、歩

く二人を、足早に何人かが追い越していった。

鍬をかかえる者。背に薪を背負う者。みな家路に急いでいる。

妖獣と呼ばれるモノを恐れてのことだ。

闇の聖霊が支配する夜は、妖獣の世界である。

妖獣がなぜ世界に跋扈するのか、その理由を知る者はいない。

神殿においては、闇の聖霊達の中で肉体を与えられた者が妖獣であると、考えられている。が、それが真実であるかどうかは、誰にも証明する事ができない。

妖獣は闇の深い森や山などに生息することが多いが、時に餌を求めて人間の住処にも現れる異形の生き物である。まれに人を食らうこともある。よって、人々は山や森を避けて集落を形成するようになった。それどころか、夜は扉を閉ざすのが、世の常だ。

家畜などを襲う妖獣は小動物か大型犬程度の大きさである。見るからに異形の生き物であり、人々は家畜を守るため武器を持ってそれと戦う。けれど、人を喰らうことのできる妖獣には人間が手にする武器など用を成さず、対抗する力はない。

恐るべき妖力を放つ妖獣に出会うことは、すなわち死を意味するのだ。

シャオンは足を止めずに後ろからついてくる金髪の男に言った。

「早く歩かねえと、ほんとに野宿になっちまう」

「はいはい」

言いつつも、ウエルは全く急ぐ風でもない。

シャオンは舌打ちしながら、前方の様子を窺っていた。

まだ集落は視界に入ってはこない。前の集落で、この辺りは畑が多いが小一時間も歩けば次の集落に着くと教えられた。

シャオンの耳に、かすかな川のせせらぎの音が届いた。

向かって右側にある山から、流れてきたのであろうか。

不貞腐れながらもしばらく歩いていくと、予想通り、川に行き当たった。大人の身丈ほどの川幅に小さな橋が架けられており、その先は二手に分かれていた。

二手に分かれた行き先のどちらにも、煙が微かに立ち上っているのが見える。

「おい、どっちだ？」

「左、ではありませんか？ まさか王都が山に近い所にあるわけもないですし」

「だよなあ」

シャオンは右側に薄い影のように細く立ち上る煙を見上げながら、その横手に広がる連綿と続く高い山々を見やった。王都とは、いわば国の中心。妖獣の住処である山を敬遠するのは当然の事だ。

「じゃ、左かな」

シャオンは、軽い口調で言い、左の道を指差した。

と、その先に。

一人の老人が膝を抱えて座っていた。

橋のたもとである。

橋に背をあずけ、膝を抱えている。両足の間から左肩にかけて杖を立てかけていた。杖は金に光り、先には大型の鳥を模した細工がなされ、まわりにいくらかの輪が装飾として下がっている。髪は見事なまでの白髪であった。不健康そうな生白い顔にはしわが刻まれている。身なりは決して貧しそうではない。羽織っている外套も、艶のある織物であった。

物乞いにはとうてい見えなかった。

「そこな御仁」

ウエルとシャオンが橋に近付き通り過ぎようとした時、老人が声をかけてきた。

年に似合わず、張りのある声音で流暢に大陸の標準語を操っている。

「どこかでお会いたことはなかるうか」

だが次に口から滑り出した声は、低く聞き取りにくいものだった。わざと声を抑えている、といった感じである。慇懃な物腰は不快さを与えないが、口元に浮かんだ人のよさそうな笑みと、どこか冷然

とした瞳が、老人の印象をちぐはぐなものにしている。

胡散臭そうな目を向けるシャオンを、老人は一瞥した。

「そなたではない、そちらの品よき貴人よ」

シャオンは目を剥いた。

「おいジジイ。イヤにはつきり言うじゃねえかよ！」

あからさまに言われる毒舌に知らぬ振りを通せるほどには、シャオンは寛闊な気性ではないのだ。

足を一歩踏み出したシャオンの肩を、後ろからすかさずウエルが掴んできた。

「私のことでございますか？」

「他に誰がおるかな」

「ほっとけ、ウエル。関わりにならねえ方がいいぜ」

シャオンは吐き捨てるように言って、老人を無視して行くつもりで橋の方に向きを変えた。

「そうかの」

が、老人はゆるぎない瞳をウエルに向けた。ウエルのほうも老人から視線をはずさずに、真っ直ぐに相対している。

「あなた様は？」

老人は口の端を片方持ち上げて笑った。生白い顔に、いやに優しく見える笑みが浮かぶ。

「さあて」

ウエルは表情を全く動かさずに、微かな笑をたたえたまま老人を見下ろしていた。

「行くぜ、ウエル。こんな爺に関わることねえ」

二人は踵を返して橋を渡りかけた。すると後ろから、声を殺し、喉の奥で低く笑う声が聞こえてきた。

「何が可笑しいんだ、てめえ」

シャオンは足を止め、腰の剣の柄に手を当てて凄んで見せた。

「いけませんよ、シャオン」

「うるせえな、氣にくわねえ野郎だ」

ウエルがシャオンの剣の柄に手をあて、今にも引き抜きそうな腕を押さえながら前に出た。

胸を張り、姿勢よくたたずむウエルは、毅然と老人に相對している。わずかな笑みを湛えた温容な顔とゆったりとした空気を持つ口調だけは変わらなかった。

「私に何か御用がありでしたか」

「そうであつたかの」

老人の口調は何事もなかったかのようなとぼけたものだ。

「行こうぜ、ウエル」

老人を見つめたままたたずむウエルの衣服の裾をシャオンは掴んで引いた。

「お二方とも、剣をお使いになられる。一つ力を貸して頂きたい事があるのですがなあ」

老人の目は笑っていた。しわが深くなっている。けれど、その温和な表情からは全く感情を読み取ることが出来ない。笑っているのに、そうではないように感じる、奇妙な違和感だった。

「だめだぜ、じいさん。あんた、前を歩いていた奴にも同じこと言つてたる。ちゃあんと聞こえてたんだぜ」

シャオンの言葉に老人は小首を傾げた。

前を歩く人間。確かに二人を追いつ越していった者が何人かはいたが、決して並んで歩いていた者がいたわけではない。既に先に歩いていた者の姿は橋の向こうに消えてない。

言つてしまつてから、シャオンは、慌てて口をつぐんだ。

隣から、責め立てるような視線が注がれる。シャオンはちらりとウエルを盗み見て、舌打ちした。

「行きましよう」

ウエルに促されて、シャオンも橋を渡りかける。

「どちらに参られる。王都に向かうなら、右の街道が早道でございますよ。右も左もいずれ合流し、王都に入る。なれど、今日の宿は、右の集落でお取りになるがよかるうて。もう日も落ちますからな、

そのほうが近うございますよ」

老人が、橋のたもとに座ったまま悠然と微笑みかけていた。

ウエルとシャオンは顔を見合わせた。老人の言葉をすべて信じたわけではなかった。けれどその時二人は、確かに二つある道のどちらを行くべきか、明確な答えを知らなかったのだ。

ウエルが丁寧な老人に頭を下げる。黄金の髪が、音をたてたかのような錯覚を覚える滑らかさで肩から滑り落ちた。

無論シャオンは振り向きすらしなかった。

この時はシャオンですら、老人の言葉を信じていた。山側にある街道を進むことに躊躇いはあったが、老人の言葉を否定するだけの根拠もまたなかった。山のたもとを迂回して左右の街道が合流し、王都に入ること十分考えられる。日が落ちかけた今は、一刻も早く宿をとる必要もあった。

第一章・燃ゆる炎の紋章…… 3

「どうしてあんなことを言ったのです」

半歩うしろを歩くウエルが、たしなめるように声をかけた。ゆったりした調子は同じなのに、先程までの柔らかな空気は一切含まない、責めるような言い方だった。

「悪かったよ」

肩をすぼめるシャオンの声も、至極不機嫌だった。

老人と別れてから、ウエルの機嫌が悪い。

ウエルの機嫌が悪い時、彼の口元にあるわずかな笑みはきれいに失われる。いつも口元に湛えた笑みはウエルの印象を柔和に見せる役割を果たしていた。もともと目元が涼しく顔の造作が良いので、機嫌を損ねて無表情になるとひどく冷酷に変貌する。幼子すら、泣き出してしまふのではないかと思われるほどの迫力だった。

「でもほんとだぜ。先に歩いてた剣を下げた奴を捕まえて、力を貸せて言ってやがったんだ。同じことをよ。おかしいだろうがよ」

自分でも言い訳がましいと気付いていながらも、黙ってはいられなかった。

「シャオンの耳のいいのはよく判りましたが、あんな風に言っっては怪しまれますよ」

「分かってるよ。だからいつも気をつけてんだろ」

拗ねた子供と同じく口籠りながら言ってから、シャオンは頭の後ろで組んでいた手を解き、歩く足をはたと止めた。

「ばれたかな」

「さあ、どうでしょうか。普通の人間には遠く先を歩く者の会話など聞こえませんかね。それをあの老人が気付いたかどうか」

唸り声を上げて、シャオンは沈黙した。左目を隠している黒い布をさすりながら天を仰いで嘆息する。

酷い傷を負った左目。妖霊にとり憑かれた父親・シェバから逃げ

る時に負った傷だ。

シャオン最大のコンプレックスは、グリウスで仲間を得てから少しずつ癒えてきていた。傷を隠し、過去を塗りこめる必要が薄らいだことで、異常な聴力や嗅覚に関しても、気が緩んで開放してしまうことが多くなった。

傷があっても、妖獣と同じ力を持っていたても、それを許して受け入れてくれる人間がいることで、シャオンは強くなったのだった。そのことが油断をうむとは思いもしなかった。

そのまま、二人は黙って道を歩いていた。

橋のたもとに座っていた老人の言葉通り右に進んだ二人であったが、歩けど歩けど集落すら見えてこない。徐々に山が眼前に迫り、日が山の頂を赤く焦がし始めていた。

周囲に見えるものは、たわわに実った果実の畑と、黄金に光る麦の畑だけである。

「騙された」

老人の言葉尻から、すぐに集落へ辿り着けると考えていたシャオンは憎々しげに地面を足で蹴り上げた。横手からウエルがなだめるように言う。

「確かに集落から上がる釜戸の煙が見えていたのですがね。ま、夜空を眺めながら眠るのもいいでしょう」

シャオンはウエルの淡々とした冷静な言葉に、右眉を上げる。

何かに気付いたように、シャオンは慌てて懷に手を当てた。すぐにそこに硬いものが触れて、安堵したように息をつく。

「ああ、よかった。金はちゃんとあったぜ。あのジジイにやられちゃったかと思っただぜ」

「今は懷が暖かいですが、いつまでもお金があると思ってはいけません」

「うるせ、説教神父め」

また盗まれたかと思っただけだ、という言葉は呑み込んだ。グリウスに来る前、金を盗まれた苦い思い出が、まざまざと甦った。

行くところが定まらないなら、世界を見て回りたい、というウエルの希望から、二人は妖獣退治や病人の治療、用心棒など、その時々で色々な仕事を請負ながら旅をしている。いつもいつも仕事があるわけではない。シャオンにとっては「金」こそがすべてであった。それだけは、何があるうと変わっていない。

シャオンは時おり踵で地面を蹴りながら、半歩後ろを歩くウエルに思いをはせた。

もうちょつと素直になれねえもんかねえ。

ウエルは滅多に考えていることが顔に出ないし口にも出さない。常にあるのかないのかわずかな笑みを口元に浮かべて、まるで聖人でも装っているかの如き顔だ。ウエルが微笑みという仮面をはずす事は滅多にない。

時々何を考えているのか分からなくなることが、未だにある。

ただ確実に、ウエルが変わってきたことも感じていた。グリウスとともにシエバ皇帝を倒し、ウエルの存在はかなり近くなった。ようやくシャオンの前で、素直に感情を少しずつ出すようになってきたからだ。

それはシャオンにとっては、喜ぶべき事だった。

「シャオン、集落です」

ウエルの声がシャオンを現実に取り戻した。目の前に家の明かりが小さく見え始めていた。

「ほんとだ、助かった。どっか親切な家に泊めてもらえるぞ」

すかさず後ろから、呆れたような溜息がシャオンの耳に届く。

けれど、ここで何かを返しては、何倍にもなって仕返しに来る。

そう思っ、シャオンは敢えて何も言わなかった。

だが、そんな安堵は一瞬のことだった。

「まて」

シャオンは手で後ろの相棒を止めた。

「どうかしましたか」

ウエルは立ち止まったシャオンの前に出た。

シャオンは何か集中するように、瞳を閉じている。

頬をなぜるような微かな風が、向かう先から流れてくる。

シャオンの鼻翼が小さく動いた。

「何か匂いますか」

「血だ」

シャオンは右目を開けて、向かう先の集落を見た。目を眇め、ウエルを見やる。

「腐った血の臭いがする」

シャオンは柳眉を寄せるウエルを横目で見ながら、腰に携えた剣の柄に手を当てた。

「でもシャオン、妖しい気配はありませんよ。妖獣のような気配を私は感じませんが」

「いや、確かに臭う」

その言葉に、ウエルはいつものわずかな笑みを口元に湛えた。不敵に細められた瞳は、悪戯を待ち望む子供のような、期待に満ちた輝きを宿していた。

シャオンもウエルの顔を見て、口の端を持ち上げる。

「なんでえ。お前も退屈してんじゃねえかよ」

「おや、私がいつそんな事を言いました？」

「顔が言っただよ、顔が！ お前も俺と同じじゃねえか」

ウエルとシャオンはどちらが言い出したわけでもなく足を速めた。シャオンは次第に強くなる悪臭のため、手で鼻を覆った。饅えて錆びたような臭いは、シャオンの鼻の粘膜を溶解しそうなほど強烈だった。だが、ウエルは涼しい顔をしたまま、特に臭いを感知している様子はない。

シャオンだけが、感知できる臭いだ。シャオンの人並みはずれた嗅覚と、聴覚が、異変を捉えたのである。

「やはり、妖獣の気配はありませんよ。妖力を放ったような名残も感じません」

ウエルが抑えた声で囁くように言った。

「けど、妖獣じゃねえのになんで血の臭いなんかすんだよ。それにこれは古い血と新しい血と……とにかくすげえ数だぜ」

ウエルの表情も次第に険しくなりだした。彼が持つ、聖なる力には、いまだ何も感応していないらしい。

次第に速まる足は、深い草むらを踏みしめていた。

「ここだ」

それは鄙びた石造りの建物だった。

奥には、薄暗がりの中に家屋が見える。集落の入口とも見える位置に立っているようだ。

背の高い入口の扉は二枚合わせになっており、その周囲を植物の葉を模った彫刻が飾っている。朽ちかけた石壁には、ところどころ煤けた跡が残っていた。少し手前には太い柱と思しき痕跡があったが、それも破壊されていた。民家ではありえない大きさは、地方の領主館並みである。だが、領主館ではありえない。

ヨウーワ西部では、神殿の壁に白亜の特別な石を使う決まりがある。煤けて朽ちてはいるが、これはまさしく白亜の石壁だ。周囲には、石垣か大きな柱を立てることが通例で、例に漏れずその痕跡がある。対して、東部では神獣信仰のほうが強くと、聖獣像が建てられる事が多いが、この辺りにはそのような習慣はない。

「神殿じゃねえか、これ」

「私もそう思います」

シャオンは眉を寄せた。

これはただ事ではない。この血生臭い胸の悪くなる臭い。それがたとえ朽ちていようと、神と聖霊を祭る神殿から漂ってくるとは考えられない。

神殿とは、この世界においてはまさしく聖地であるからだ。神殿は政治的な事柄とは一線を画し、世界の祭事を一手に引き受ける役割を持っている。世を創造した神とそれを支える聖霊に感謝の意を捧げる場なのである。

ウエルの持つ、聖なる力は、いわば聖霊達の力。聖霊と人間、そ

のわずかに折り重なる位置に存在する者が持つ力のことである。

ヨウワにおける唯一絶対神が創造した世界を守るために聖霊は存在している。多くは、自然やその現象と同義語で使用されている。大地、水、山。それだけでない、草花の一本一本まで、大なり小なり聖霊達はある。聖霊は神の秩序に遵い（したがい）、世界を維持するために力を放ち続けているのだ。

「信じられません。朽ちていようと、神殿から血の臭いがするなど……聖霊への冒瀆です」

あからさまに不快な顔を見せるウエルを横目に、シャオンが足を進めた。雑草が生え放題の荒れた通路を通り、扉に近付いた。

扉を押すと、あっさりと、軋んだ音をたてて開く。音は闇の中に意外に大きく反響した。

中は、闇だった。一切の光源を拒絶するかのような、漆黒の闇。

「見てください。窓には暗幕が張られていますよ」

「なんだこりゃ……」

シャオンは朽ちた神殿に足を踏み入れた。

外は荒れ放題であるのに、中はいやに小奇麗だった。月明かりが開けられた扉から神殿の中を照らしている。そのかすかな光をもつとしても、建物の内部には何も無いことが窺い知れた。

中央の通路は人が二人並んで通れるくらいに空けられ、両脇に白い布が敷かれている。ところどころ寄れてシミが見えるが、とても外の外観からは考えられない新しさだ。空けられた通路には整然と一定の間隔で燭台が立てられている。弧を描くような曲線で造られた天井は高く、顎を上げて仰がなければならない。

中央の通路を奥に進むにつれて、シャオンはついに鼻をつまんでしまった。

「だんだん臭いが強くなるぜ」

数歩後ろを歩くウエルが、はたと足を止めた。

「妖獣の、妖力が働いた跡が感じられます」

「妖獣だと？」

ウエルの緊張を含んだ声に、シャオンは一瞬、心臓が凍りついたかと錯覚した。

もしも、妖獣であるのなら。それなりの覚悟がいる場合がある。それが、人を喰らう妖獣であつたなら。

人を喰らう強い妖獣など、実際に見た者などほとんど存在し得ないはずだ。出会えば、喰われる。確かに、この世界で理由もなく行方知れずになる者は多い。

それほどに闇の力を放つ妖獣は恐ろしいのである。

二人は眉をひそめ、そのまま奥へと進んだ。瞳に、ある物を捉えるまでは。

「ウエル！ ウエル」

朽ちた神殿の中に響き渡る大声でシャオンが疾呼した。ウエルもそれを責めはしなかった。二人の目の前に、一体の像があつたからである。

黒い、鳥であつた。

艶やかな黒い色が、辺りの闇に溶け込んでいるはずなのにはつきりと浮かび上がっている。

大きく広げた翼は今にもはためきそうで、鋭いくちばしからは、甲高い奇声を発しそうであつた。大きな金の双眸は今にも眇められ、睨まれそうなほど生々しい。

「誰だね、あんた達」

黒鳥の像の前で立ち尽くしていた二人に、突如として声をかける者がいた。

シャオンは素早く数歩踏み出し、かまわず抜刀していた。

ウエルも羽織っていた外套を背に跳ね除け、振り向きざまに剣の柄を握っている。

一瞬の静寂が、その場を支配した。

朽ちた神殿の入口にたたずむ影がある。

月明かりを背にしていたので顔ははっきりしない。立っていたのは、ほっそりとした女性のようだった。

「何やってんだね、こんなところで」

第一章・燃ゆる炎の紋章…… 4

「驚かすなよな、まったく」

シャオンは口を食べ物でいっぱいにする以外は、ぶつぶつ文句を言いながら、出された食事を豪快に平らげていた。

「あんなところに突っ立ってたら、化けもんだと思っちゃまうぜ」

「シャオン、行儀が悪いですよ。申し訳ありません、ナダエルさん。ちゃんと宿泊代はお支払いいたしますので」

ウエルは姿勢を正して椅子に腰掛け、炊事場から姿を現した女に頭を下げた。食事のほうはあまり進んでいない。匙に一口ずつ、上品とも言える量をのせて口に運ぶ。

「金なんかいらさないよ。ほら、もうちょつと食べないのかい？ 細っこいのに、駄目じゃないか」

新しくテーブルにのせられた焼きたてのパンを、シャオンは遠慮なく自分のほうへ近づけて、片手にパンを持ってかぶりつき、片手にスプーンでスープをかけ込んだ。

「見てごらんよ、あんだ。これくらいガツついてくれないと、作った甲斐がないってもんさ」

女は大きな口をあけて笑った。

妖しげな神殿で声をかけてきた女はナダエルという名前だった。

ウエルが抜きかけた剣をおさめて道に迷ったのだと言うと、困っているなら泊まっていけばいいさ、と笑った。ちょうど、朽ちた神殿の差し向かいにある小さな家が、ナダエルの家だ。

ナダエルは少し目じりの下がった大きな瞳が穏やかな印象を与える中年くらいの女だった。女らしい丸い腰に片手をあて、まるで子供に説教をするような口調で、シャオンが引き寄せたパンの皿をウエルのほうへと引き戻しながら続けた。

「だいたい暗いのに、あんな所にいちやだめだよ。私じゃなくなつて、薄暗くなつてんのにあんなところをウロウロしてちゃ、心配に

なつて声をかけるさ。妖獣に食われちゃったらどうするんだい。あんたらの母さんが泣くよ」

シャオンが食事の手を止め、顔を上げる。うっとおしいほどの前髪が、顔の左半分を隠したままだ。右側の目で、上目遣いにナダエルを睨んだ。

何より、自分の身の上に関する話題に触れられることは大嫌いだった。母親という言葉に、過敏に反応することは止められない。

自らの父親に命を奪われた母親のことは、シャオンにとっては深い傷となっているのだった。

「シャオン」

低い声で、ウエルがたしなめる。

「へんっ」

拗ねたようにそっぽを向きつつ、またパンをほおばった。

「ところでナダエルさん、あの建物は何ですか？　ここがどこなのかも知りたいのですが」

ナダエルは並んで食事をする二人の前に腰掛けた。

「建物かい？　あれはもう朽ちて使い物にならないからねえ。それからここはアキロの東、ギャロバル領さ」

ナダエルは二人の顔を交互に見比べながら、まるで明解な回答を避けたかのように、端的にかえした。

「確か、アキロ公国はバスジル公王のもと五公によって治められていましたね。ここはギャロバル公の領地ですか」

ナダエルは驚いたように目の前に座る麗人を見たが、すぐにやや冷めたような口調で落ち着いてそれに返した。

「あんた詳しいね。へえ、驚いた……」

ナダエルの言葉に、ウエルは秀麗に笑った。端整な顔にためられた笑みには誰しも思わず目を奪われる。ナダエルもそれに従ったのか、目を細めてウエルを見返している。

「旅の途中なのかい？　王都は、そら、橋があつたらう？　あれを左に行くのさ」

「あの野郎」

シャオンは食事をほおばりながら、悪態をついた。もちろん、あの野郎とは、橋のたもとに座っていた老人のことである。

大方の予想通り、橋のたもとに座っていたおかしな老人に間違っただ道を教えられて、どうやらこの村に迷い込んだようだった。

その後二人は、ナダエルと差し障りのない話をして、泊めてもらう事になった。

翌朝。

眩しい朝日が窓から入り込むより早く、シャオンは目が覚めた。人の気配がしたからだ。

二人に用意されたのは、二階の狭い屋根裏小屋のような部屋に、毛布を二つ用意されただけの、本当に眠るためだけの空間だった。

壁に預けていた背を起こす。下に敷物を敷いていたとはいえ、体が強張っている。野宿には慣れていたつもりだが、隣国グリュックの都・グリウスにいる間、暖かな布団で眠ることが普通になっていたためか、今度は固い床が苦痛になってきていた。

「贅沢はするもんじゃねえかも……」

肩をさすりながら、シャオンは窓の外に眼をやった。外に現れた気配とは、シャオンにとっては音であった。

遠くから駆けて土を蹴る音が聞こえてきたのだ。だが、その足音は、一つ増え、二つ増え、あつという間に何人いるのか判然としなはいほどの数になった。

「ウエル、起きろ、様子がおかしい」

シャオンの緊迫した言葉にウエルもすぐさま目を開けた。

ウエルもすぐにシャオンの言葉の意味を理解したようだった。

この時既に、外では叫び声と金属同士がぶつかり合う音がしていたからだ。

「逃げられると思ってやがるのか、奪った金、返しやがれ！」

二人がナダエルの家扉を開けて外に飛び出した時、男はすでに剣を握っていた片腕を落とされ、地面に膝をついていた。

膝をつく男の背後には、三十人はくだらない人間が剣を構えて立っている。

「何やってんだ、お前ら」

シャオンは、腕を抱え込んで今にも気を失いそうな男の横に仁王立ちになった。男は粗末な格好をしていたが、足元には剣が落ちていて、腕はそれを振るうに十分と思われる肉がついていた。

ウエルは男の腕を掴み、腰に巻いていた帯で強く縛って手際よく止血した。

前には剣を構えたままの荒くれとも見える男達が、値踏みするように粘着質な視線をシャオンに向けている。

集団の先頭にいた男が、生々しい血糊のついた太い剣を肩に担いで進み出てきた。膝についている男とは比べ物にならないほどの偉丈夫であった。

「新入りか、てめえは」

「なんだと？」

「だったら覚えておくんだな。こっから逃げ出そうなんざ、契約違反だつて事をよ」

何の話だ、とシャオンは思わず言いかけた。

それを呑み込んだのは、後ろに立ったウエルの声が聞こえたからであった。

男達に聞こえないほどの囁き声で、右手を見るように告げたのだ。
集団のずつと右。

ナダエル家の差し向かいにある、朽ちた神殿の入口近くだ。

そこで老人が一人、口元に太い笑みをためて立っていた。手には鳥を模った飾りの付いた金の杖、白い髪、滑らかな絹で出来た高価な身形。

見間違うはずがない。ウエルとシャオンに、王都への道だと嘘をついて、この村に誘い込んだ老人だ。

「あいつ！」

一歩踏み込んだシャオンの後ろから、聞き覚えのある声が彼を引きとめた。

「あんた達は剣の腕がたつねえ。昨日振り向きざまに感じた殺気はただ事じゃあなかった」

驚愕に目を見開いて振り向いたシャオンの視線の先にいたのは、昨日と変わらぬ穏やかな面差しのだダエルだった。

腰に手をあて、しかし昨夜とは違って、瞳は気の良い小母さんではなくなっていた。冷めた瞳には、何の感慨もない。

「グルだったのか」

「まんまとやられましたね」

シャオンの横に並び立つて、ウエルがあるかないかの笑みを深くして静かに呟いた。

二人は改めて辺りを見回した。

昨日は日が落ちていて、ほとんど集落の様子をうかがい知ることが出来なかった。

そこは奇妙な集落だった。

比較的新しい家が建っているかと思うと、すぐ横には焼失したと思われる崩れた家屋がある。それも既に何年も経って風化したような、そういう朽ち方であった。それも一軒や二軒ではない。新旧入り混じった状態で集落は奥へと続いている。その比較的新しいほうの家屋からは、何人もの者が覗くようにこちらの様子を窺っていた。一様に、着古して薄汚れた衣服を身にまとい、荒んだ瞳で睨むように見ている。さながら世界の総てを怨んでいるかのような憎しみと悲しみを彷彿とさせる瞳である。

妖しげな神殿は、そんな集落の入口に建っていた。

炎を模った紋章がその神殿の上に刻まれている。

蠟燭の炎が、ゆらゆらと揺れているかのような紋章が。

第二章・囚われし光の力…… 1

一行が橋のたもとに到着したのは、ちょうど昼ごろだった。

栗毛の馬にまたがる先頭の男が手綱を引いた。六人の従者たちもそれにしたがって足を止める。

「ここからギャロバル領か」

「そうです。この橋までがバスジル公王領、ここからギャロバル公領になります」

「自らの領地に足を運ぶのが初めてとは、何の冗談であろうな」

険のこもった声音で吐き捨てるように言いながら、栗毛の馬に乗った男が苦笑する。

「それで、リズバロール様」

「言わなくてもわかっている、ヒューム」

馬首を向き直させると、くつきりとした二重の印象的な青い目が苦言を呈そうとしている側近に向けられた。瞳には貴人としての品格と英知に溢れた光が見え隠れする。短く切りそろえた髪も、陽の光を受けて金に輝いていた。

「私はお忍びだ。もちろん領内を見聞するため。それでよかろう」

「結構でございます。決して、あの事には首を突っ込まれませんように」

側近ヒュームは悪びれた風もなく厳しい口調でリズバロールに釘を刺してきた。

少し細い目がヒュームを少しばかり険相に見せる。同じく金の髪は後ろで几帳面に束ねられていた。

確かに冷静沈着で面白みにはかけるが、いつも卒なく、無駄なく、すべての事を巧く運んでくれる。リズバロールは誰よりもヒュームを頼りとし、信頼していた。

「このまま馬を走らせれば、ギャロバル領主館に到着いたします。行政官のザインにはすでに使いを出してありますので、ご心配なさ

らず」

「お前のすることに心配などせぬ」

ため息混じりに呟いたリズバロルは、鼻を鳴らした馬の首筋を撫でてやりながら、辺りを見回した。

今リズバロルが立つのは、二つの街道が合流した地点。そこに川が流れている。

大人の身丈ほどの川幅に橋が渡してある。その先は、一面の畑。

大陸の方側は連綿と続く山脈だ。

連なる山嶺は高く、大陸中央部とアキロを隔てている。すべてを閉ざし、拒絶し、まるで追い込むように、そこに山はあり、厳然とリズバロルを見下ろしているかのようであった。

リズバロルは険しい山々から信頼する側近へと溜め息交じりに視線を戻した。

「ヒューム。もしもこの山がアキロと大陸中央を隔てていなければ、もつと状況は変わっていたであろうか」

ヒュームは、一瞬何を聞くのかと細い目を更に眇めたが、すぐにリズバロルの求める的確な答を返した。

「いえ、リズバロル様。アキロはこの山があつてこそ、現在も存命でいられるのですよ」

まるで誰かに嫌味でも言うような口調に、リズバロルは思わず失笑していた。

「そうだな」

アキロ公国は、ヨウーワ大陸の西に位置する小国である。

西を海。

東は山脈に囲われている。

北に大国ギュフロス帝国。

南に商業国家グリユックがある。

「北のギュフロスと南のグリユック、ともに同盟を一旦は結びましたが、結局ギュフロスとは山から産出する鉱石の境界で争いとなり、グリユックはシェバ帝国に滅ぼされてしまいました。どのみち、ア

キロは孤立、困窮は免れなかったのです。それでも、シェバ帝国が、東のビュローに梃子摺ってくれたおかげでこうして生きていられる。それだけでも良しとすべしですな」

グリユックは、まだ王家が存在していた頃から、ヨウーワ南西における最大の港を持ち、強力な海軍を擁していた。街道の両端には検問所を配置し、国に出入りする人間を管理する一方、積極的に外交を進め、商人達には税制において優遇する措置をとり、商業を発展させた。結果、ヨウーワ大陸の中で、グリユックに赴けば手に入らぬものは無いとまで言わしめた大国にのし上がっていた。

しかし、十五年前、グリユック王家は大陸の東で勢力を伸ばすシェバ帝国によって滅ぼされ、現在はグリユック自治区として名を残すのみだ。シェバ帝国は、大陸の東にある小国であったが、近年一気に勢力を伸ばした。噂では、戦闘にはどういいうわけか妖獣を放ち、残虐で暴戾の限りを尽くしていると言われている。

アキロもグリユックの繁栄の恩恵を少なからず受けていた国であった。

無論、グリユックの国力自体はシェバ帝国に侵略されて後も変わってはいない。シェバよりつかわれた自治領主の采配にもよるが、グリユックの完成された商業価値をシェバ帝国の人間が簡単に覆すことが出来ようはずもないからである。

しかし、アキロにとってシェバ帝国の侵略は何の利ももたらしはしなかった。

長年のグリユックとの国交もシェバ帝国の侵略によって消滅し、国境においてはシェバ軍が常駐するに至って、物資の運搬も難しくなった。シェバの狙いが、次にアキロにあることは明白であった。

ところが、シェバ帝国はアキロを侵略できなかった。東に位置する大国ビュローの激しい抵抗を前に苦戦を強いられ、ヨウーワ大陸南部統一を目前に、アキロ侵略を断念していたのである。

それでも、小競り合いは続いていた。現に数ヶ月ほど前にも国境にシェバ軍の影が見えたが、この時はシェバ軍から和平の申し出が

あり、特に戦端も開かずに事なきを得ている。

かといって、アキロ公国は北の大国ギュフロスと親交があったわけでもなかった。

広大な領土を有するヨウーワ最大の大国には、アキロの存在など何の価値もない。

もともとギュフロスは他国を侵略するをよしとする国柄でもなかった。

現在のアキロは、経済的、外交的には厳しい状況下にあると言わざるを得ない。

ギュフロス大帝国、アキロ公国、シェバ帝国グリュック。この微妙な力関係は、少なからずアキロを追い込みつつあった。

「公妃殿下もご不幸だ。姉君とともにギュフロスから、アキロとグリュックに嫁がれたというのに、そのギュフロスとは諍い、姉君はシェバの侵略によって惨殺された。どういう因縁であるうな」

リズバロルは鼻を鳴らす馬を鎮めながら、再び息をついた。

「しかし、今度ばかりは話は別だ。公王陛下は何故軍を差し向けられぬ。すべてをギャロバルに押し付けて、まるで我らが失態の如き言われようではないか」

「リズバロル様」

窘めるようにヒュームが首を横に振った。

「滅多なことを申されますな」

声を落とし、手厳しい声でヒュームが諫める。

リズバロルはヒュームの声が聞こえていないかのように、振り向きすらなかった。

「憂うべきは、前面の敵ではなく後背の味方というわけだ」

リズバロルはヒュームが何かを言う前に、馬の腹を蹴っていた。

第二章・囚われし光の力…… 2

「しっかり見張りなんかたてやがって。せつかく堅苦しい城を出て自由に旅することになったってのによ……」

シャオンは不貞腐れた子供のように床に寝転がって白い歯を剥いた。

ナダエルの家の一階に、シャオンとウエルは押し込められていた。昨晚休んだのと同じ部屋である。

部屋には小さな窓が一つしかなく、屋根裏部屋ともみえる。

「下にもいますね。三人立っています」

ウエルが唯一の窓から下を覗き見て言った。

「その扉の向こうにも二人いる」

シャオンは寝転んだまま顎をしゃくって扉を睨みつけた。扉を隔てようと、それはシャオンには何の障害にもなりはしない。鋭い感覚で、扉の外にいる人間の気配の数を正確に言い当てた。

「こんな事して一体何の得になるって言うんだ？ 俺達の剣の腕がそんなに欲しいかよ。厳つい奴をあんだだけ雇っておきながらよ」

「いいえ」

ウエルは窓から外を見下ろしながら、口元の笑みを失ったまま冷然と言った。

「違いますね」

「何がだよ」

「私達が見てしまったからです」

「まさか、あの汚たねえ建物のことを言ってるのか？」

振り向いたウエルの表情は、背筋が寒くなるほど冷涼としている。シャオンは慌てて体を起こし、行儀悪く胡坐をかいた。

「待てよ、だからって何で俺達がこんな目に遭わなきゃなんねえのよ」

「わかりません」

あつさりと返されて、シャオンは思わず全力疾走中に足をかけられたように、前につんのめりそうになった。

「お前なあ、だったら、言うなよ」

「何故です？ 事実ですよ」

ウエル表情は全く動かない。それどころか、徐々にその空のようになり瞳に怒りの炎が揺らぎだしたように見える。

まずい。ここで機嫌を損ねては。

シャオンは身構えた。

ウエルは穏やかそうにみえて、実は危険人物だ。怒らせると聖霊の一つや二つ連れ出して、何をするか分からない。実際、ウエルを怒らせた者の目の前が真空になって炸裂したことがある。

前轍を踏むわけにはいかない。

シャオンはそう思って、寸での所で思考を立て直し、ウエルに問うた。

「でも、最初からそのつもりだったんじゃないか。俺達をこっちに誘ったんだし」

ウエルは口元に、あるかないかの薄い笑みを鮮やかに甦らせた。

「シャオンが血の臭いを嗅ぎ付けなければ、あんな建物の中を覗きはしませんでしたよ」

ああ、そうか。とシャオンは納得した。

確かに言われてみればそうだ。薄暗かったあの時間に、朽ちかけた不気味な建物の中を覗こうなどという好き者がどこにいたろうか。炎の紋のついた神殿と見えるあの建物に入ったのは、そもそも強烈な血の臭いのせいであった。

「もちろん、何かしらの企みに私達を誘い込むつもりではあったでしょう。何故だか強引過ぎる所がどうも気にかかりますが、まあ、どう見ても私達は真つ当な旅行者には見えないでしょうからね。彼らは契約と言っていたでしょう？ 何かしらの企みに、人手がいるに違いありません。剣を使えるものを誘い込み、金にものを言わせて雇っているのかもしれないね。でも、私たちは迷うことなく

あの朽ちた建物の扉を開けた。都合よくナダエルが来たことにも、こう考えたと頷けませんか？ あれ以上、私達を建物の奥に入れたくなかった、と」

綺麗な笑みを浮かべた涼しい顔で、次々と恐るべき推測を並べ立てるウエルを見て、シャオンは呆けたように口をあけて聞き入っていた。

「お前、よくそんなに頭が回るな」

「褒めてもらったと思っておきます」

にこやかに微笑むウエルに、シャオンはまたも背筋に冷たいものが走った。

だから、こいつは怖い。

物事は必ず深く、底の底まで熟考する。シャオンが知る限り、それは必ず的を射ていて外れたことは一度もない。暖かな感情など何一つ持ち合わせていないのではないかと疑いたくなるほど、ウエルは常に冷静であり、悠揚というか冷徹というか、とにかく世俗とは違う世界に常に思考をおいている。

「ですから、決して悟られてはなりません」

「なにを？」

とぼけたように返答するシャオンに、ウエルは柳眉を寄せた。

「こんなに話しているのに、あなたは分かりませんか？」

「悪うございました。どうぞ、教えて、ください」

シャオンは舌打ちして、十分厭味っぽく返してやった。

ウエルは窓際からシャオンのそばに来ると隣にしゃがんだ。

同時に口元の笑みの代わりに、珍しく目を眇めて声をおとす。

「私たちの力を。シャオンの人間離れた聴力と嗅覚、そして私の聖なる力。彼らが何を企むにしても、これを持つ事が知れたら是非でも仲間に引き入れようとするでしょう」

「もう取り返しかねえかもよ。仲間になるか、死ぬか　でもま、気をつけるか。使われるのなんざ、ごめんだからな」

シャオンは不敵な笑みを口元に浮かべた。

ウエルも、負けずに秀麗に微笑む。

「ちいと、待てよ」

「なんです？」

シャオンは横に腰を下ろしたウエルのほうに向き直った。

「自分の耳の良さの話を聞いて思い出したんだ」

珍しくシャオンが真面目そうな顔で、右眉をひそめた。

「あの時、俺はナダエルが声をかけるまで、気付かなかったんだ」

ウエルも思いがけない指摘を受けたと言わんばかりに目を見開いた。

「確かに俺はあの気色悪い鳥の像に気をとられてた。大声でお前を呼んでたし、外に気を配るなんて出来なかったさ。でも、あの雑草の生えた道って言えねえ所をナダエルが歩けば」

「そういえば、そうでした」

ナダエルが声をかけたのは、ウエルとシャオンが黒鳥の像の前に立った時であった。しかし何かしらの前触れがあつたろうか。

人並みはずれた聴覚と鋭さを持つシャオンが、全く気付かないほどの気配を消す力をナダエルが持っているとも思えない。

「まさか、ナダエルって、妖獣、とか？」

「それはありません」

ウエルは静かに首を横に振った。

「人間は誰しも命の力を示す光を放っています。人間も神の子ですからね。もちろん私にはそれが見えますし、聖霊の力を持つ者はその光が強く、妖獣の光は禍々しい黒であることがほとんどです。ナダエルは普通の人間でした。もちろん聖なる力も持つてはいません。ついでを言えば、あの老人だって、普通の人間でした」

「じゃあ、なんで」

シャオンは何かを言いかけたまま、顔を扉のほうに向けた。

つられてウエルも、シャオンの視線を追う。

シャオンの瞳に炯炯とした光が宿った。

「お客さんだぜ」

程なくして、扉が開かれた。

第二章・囚われし光の力…… 3

シャオンとウエルは並んで座っていた。

前にはナダエルと、橋の袂に座っていた怪しげな老人が座っている。二人の後ろには厳つい男が腕組みをして立っていた。今朝、逃亡を図った男の腕を切り落とした男である。そうしているだけでも威圧感が多分にある。更に部屋の中には五人。いずれも剣を携えていた。

もちろん、シャオンとウエルの剣は、先ほど二階に押込められた時に奪われたままである。

誰も口を開かずに緊迫した空気が流れていた。昨夜は、同じ机でナダエルに夕食をご馳走になっていたとは思えない。

シャオンはぐるりと部屋を見渡した。部屋はさほど広くない。机を部屋の中央に置くと、周りは大人がすれ違うだけでいっぱいになる。こんな狭い所に十人も大の大人が雁首を揃えて、そのうえ、斬り合いにでもなったら、いくら剣の腕がたっても誰も傷つかずに無事でいられるとは考えられない。一振りするだけで、切っ先が誰かの皮膚を掠めてしまうだろう。いや、厳つい男が腰に下げている、一際長い剣を振り回すだけで、何人かの首が胴から離れるに違いない。

「話って何だよ」

シャオンがまず口火を切った。元来、短気なほうで、相手が話し出すのを待っていられる性質ではない。

ウエルはじつと黙って、聖人のように、超然とわずかばかりの笑みを浮かべて座っている。

「用件は昨日、橋の辺りでお願いしたのですがなあ」

とぼけた様子で話す老人の目は嬉々としていた。

シャオンは腹立たしげに目を眇めて右を向いた。そうすると左側を髪で隠しているので表情が見えにくくなる。

「でな、その返事をお聞きしたい、と、まあ、こう思っておるのじやが」

「そうおっしゃるのでしたら、何のために我々が働くのかを、説明なさるのが筋と言うものではありませんか？」

ウエルがゆっくり、かつ、淡々と返した。怒りを表わしたわけでもなく、かといって焦ったり怯えたりしている風でもない。超然と座したまま、臆することなく真っ直ぐに老人を見ている。

「なるほど」

老人は喉の奥で低く笑い、深く腰掛けた椅子の背にもたれた。

「報酬は弾む。どうじゃな。わしには主等が真っ当な旅行者には見えなんだもんでな。こう見えても年は重ねたのでな、人を見る目は持っておるつもりじゃ」

一息ついた老人のかわりに、ナダエルが身を乗り出した。

少し痩せすぎかとも思われる体を乗り出し、目じりの小じわを深くした。女が涼しい口調で言うことではなかった。

「こちらの依頼した者を、斬って欲しいのです」

「冗談じゃねえぜ。何で俺らが真っ当じゃねえって分かるのよ。自分で斬りやあいじやねえかよ」

シャオンは右に向けた顔を極わずかに正面に戻して、覗くように老人とナダエルを見据えた。

「真っ当なお方は、そのような口を利きはしませんよ」

ナダエルは揶揄するように笑った。

筋がたつとまでは言わなくても、細い体やあごの線は鋭い印象を与えがちだが、わずかに下がった目じりや大きめの瞳はどちらかと言えば優しく、少なくとも昨夜の様子では、こんな嵩高にもの言うとは思えなかった。

「ヨウーワの共通通貨で、金一袋。前金じゃ。成功すれば、十倍出そう」

「金一袋？ 前金？」

裏返ったシャオンの声が、部屋に響いた。叫ぶのと同じくして、

シャオンは懷に手を当てていた。

金一袋と言え、今シャオンが持っているものと同価値がある。共通の通貨なら、ヨウーワで困ることはない。よほどの田舎でない限り使うことが出来る。何より、金一袋があれば、例えば十家族が、一月間、毎日宴会を続けたとしてもおつりが来る。一家族なら、何年も遊んで暮らせる。畑を耕す者からすれば、月の収入の何十倍だ。

それが前金。

シャオンは生唾を呑んでいた。

「シャオン」

ウエルが咳払いをしながら冷えた視線を送るのにもかまわずに、シャオンは老人に向き直った。顎をしゃくって、老人とナダエルの後ろに立つ者達を指し示す。

「そいつらも、そうやって雇ったのかよ」

「いいえ。彼らは仲間です」

ナダエルは後ろを振り向きつつ、巨漢の男を見上げた。

男はに、っと口を綻ばせ、熊が歩くように大きな足音を立ててシャオンの元へ歩み寄ってきた。

「貴様、自分の立場が分かっているのか。何かを尋ねるなんざ、無用のことだ。やるか、やらねえか、返事はそれだけでいいんだぜ」
言い終わると同時に腰掛けたシャオンの胸ぐらを乱暴に掴んだ。
た。

「金を受け取ったくせして逃げたりなんざすりゃあ、今朝の男のようになるまでさ」

偉丈夫な男は、そう言つて下卑た笑みを浮かべ、薄い唇を舌で下品に潤した。

シャオンも体格が悪いほうではない。剣を振るうに十分な筋肉には恵まれているし、背も平均よりは優に高い。

それでも男の腕力には抗えなかった。
引きずられるようにして立たされる。

「ひっ！」

ナダエルの悲鳴で、皆が一斉にシャオンを見た。引きずり上げられた時に、顔の左を隠していた髪が、風に乗ったかのように捲れ上がったのだ。

ウエルは静かに目を閉じていた。

ナダエルは椅子から立ち上がり、口元を手で覆っていた。

老人は太い笑みを湛えたまま、表情を変えない。

「なに怖がつてんだ、てめえ」

巨漢の男の顔に驚愕の表情を見て取って、シャオンは鼻でせせら笑った。

シャオンの顔は酷くえぐれていた。

左眉の付け根のすぐ下あたりから頬骨にかけて醜く盛り上がった二本の傷がある。傷は薄紅色に盛り上がり、その周りの皮膚は暗紫色に変色している。無論、眼窩もそれと分からぬ位にえぐられ、眼球は失われている。

それはさながら、妖獣と見まごうほどの、痛々しい傷であった。

老人が低い声で尋ねた。

「妖獣に、か？」

「そうだ。俺は妖獣と権力と、嘘つく奴がいつちばん嫌いだね」

シャオンの挑発的な瞳が、巨漢の手を胸元から退けさせた。

手で豊かな黒髪を整え、再び顔の左を隠す。

「いいだろう、受けてやるよ」

「シャオン！」

シャオンはウエルの非難めいた声も無視するように老人を見据えていた。どんな虚言も許さぬ強い光を持つ黒い瞳で。

老人は表情を変えなかった。

「よかるうて。ナダエル、金を用意しておくれ。早速仕事だ」

第二章・囚われし光の力…… 4

「何故、何も考えずに仕事を受けてしまったりしたんですか」

「なりゆき」

「まったく、あなたって人は」

ウエルとシャオンの二人は、十人ほどの集団の後方で馬の首を並べて進んでいた。取り上げられた剣も返され、屋根裏からも昇格して寝台のある部屋を与えてもらえた。

今は先頭集団とは少し間をあげ、声を落として話している。

「け、なに言つてやがんだ。さっきの屋根裏にいる時だって、逃げようと思えば逃げられたじゃねえか。でもウエルはそうしなかった。さっきもずっと黙ってたじゃねえかよ」

「それは決めかねていたからです。引き際も肝心ですよ。シャオンは焦りすぎます。もう少し聞き出せたかもしれないと言うのに、あっさり受けてしまうのですから」

「なんでえ、受けるつもりだったんじゃないじゃねえかよ」

「そんな事言いましたか？」

「けっ」

ウエルは呆れたような口を利きながら、しかし笑みを失ってはいなかった。ゆったりとした口調の中に、どこか軽快な響きが含まれている。シャオンも拗ねたように口をゆがめたが、一時のことだった。

先頭にはあの巨漢がいる。太い腕も、筋のたった首筋も到底一人の手では握りきれない。腰に挿された長剣もナダエルあたりが持てば地に着くだろう。

「ドーガス様」

巨漢の男のすぐ後ろにいた男が馬を寄せて何かを話しかけている。それを聞いて、二人ははじめて巨漢がドーガスという名であることを知った。

集落を出て程なく、ドーガスは手を上げて一行の足を止めた。

「この先が今日の仕事場だ」

いかにも自分が一番偉いとはかりに胸を張り、一同をぐるりと見渡す。

従う十人が、まるで合図を受けたかのように揃って頷いた。

「いいか、仕事は全員斬り殺すことだ。一人も逃しちゃならねえ。いいな。忘れずにとどめを刺せ」

残忍な言葉にさも嬉しそうな響きが多分に含まれている。シャオンは胸が悪くなるのを感じた。

シャオンとて、今まで神に堂々と顔向けできる事ばかりしてきたわけではない。傭兵として雇われて戦にも参加し、顔も知らない敵の兵を幾人も斬ってきた。幼い頃はそうと知らず、盗賊の仲間として盗みも働いてきた。

それでも、ドーガスの言葉はどうにも聞き逃すことができなかった。

思わずシャオンは馬を前に進めようと手綱を引き締めた。が、腕をウエルに捕まれる。

聖人の如き落ち着いた顔が、シャオンの目に入った。

ウエルはゆつくりと左右に首を振った。わずかな笑が言いたい事を物語っている。

今は黙って従う。何も分からないまま突進してはいけない。

彼の不敵な笑みがシャオンにそう思わせた。

「いくぜ。この先の橋の辺りだ。敵は七人だ」

再びドーガスの声が響き、一向は目的地に向かって馬を駆った。

左手に連綿と続く山を見ながら、一向は馬を進めた。日はもっとも高い位置にあり、暖かな日差しを地に降らせる。汗ばむほどではないにしろ、もう少し涼やかな風でもあれば気分の良さそうな日中であつた。

昨日の夕刻、二人が老人に騙されて進んだ道だ。

進むと川幅は狭いが小さな橋が架かった場所に出る。昨日はそこ

に、まだ名も知らぬ老人が座っていた。ウエルとシャオンに、金を握らせて傭兵まがいの仕事を押し付けた怪しい老人だ。

ドーガスの言った通り、橋の手前には数名の人影があった。昨日シャオン達が歩いた道ではない、右側にのびた王都へと続く街道のほうである。数は七人。いずれも馬に跨っている。今まさに橋を渡るうとしている様子だった。

先頭に短い髪 of 身形のいい若者。すぐ傍らに髪を後ろで束ねた者。その後ろに五人が続いている。

「すでに偵察済みって事か？」

「おかしいですね」

「えっ？」

シャオンは馬を駆りながらウエルに小声で訊ねた。

「一体いつ事前に敵の人数まで把握したのです？」

けれどシャオンがそれについて考える前に、事は起こっていた。

ドーガスは、橋を渡りかけていた一行を確認すると、腰から下げた長剣を抜きさった。

馬で駆ければ一息で追いつく距離だ。

太い声とともに馬を蹴り、更に速度を上げる。後ろの十人も遅れずに続く。

ドーガスは悪鬼の如き形相で剣を振りかざし、しかも口元には野卑た笑みを浮かべていた。

相手の対応も早かった。

まるで予想していたかのように、後ろにいた五人が身形のいい若者の前に立ちはだかった。

「リスバロル様はお一人でもお行き下さい！」

髪を後ろで束ねていた男が、一番年若そうな若者の前に庇うように出た。

「二人で一人だ！ 確実に殺れ！」

ドーガスが檄を飛ばす。

騎馬であるドーガスの十人の部隊は、申し合わせたかのように二

人一組になり、それぞれ相手に向かっていく。

金属と、金属の激しく錯綜する音が響いた。

シャオンとウエルも、否応なくそれに巻き込まれていく。

「適当にかわすぜ」

シャオンの言葉に、ウエルは首を横に振った。

ウエルの視線の先には、一人の男がいた。

彼も、ウエルを見ている。髪を後ろで束ねた、鋭い目付きの男だ。

「どうしたんだ、ウエル？」

「いいですか、シャオン。何があっても早まっではいけませんよ。

ちよつと私は事の真相をつかンできます！ 後ほど合流しましょう

！」

ウエルは言い終わる前に剣を抜き、馬の腹を蹴っていた。

馬が嘶き、速度を上げる。ウエルの長い金の髪がそれにあわせて宙を舞い、光の粒子をこぼしていった。

「待てよ、ウエル！」

シャオンの呼び止める声に、ウエルは一度だけ振り返った。

口元に、艶やかな笑みを湛えて。

「信頼していますよ！」

「ウエル！」

シャオンも剣を抜き、ウエルの後を追った。

戦いは数の上で勝るドーガスが、圧倒的に有利であった。

二人一組になったドーガスの配下は、相手に対して二人同時に剣を振り下ろした。一人が馬に切りつけ、落馬したところをもう一人が貫き止めをさす。

橋の手前で繰り広げられる惨劇を回避するように、ウエルの馬は迂回して一気にリズバロールと呼ばれていた若者と、目付きの鋭い男のもとに駆け寄った。

すでにドーガスが、若者と男の前に立ちはだかっている。

「早く、リズバロール様！」

「ヒューム！ 私だけ逃げるわけにはいかぬ！」

ヒュームがドーガスに対して剣を構えた。

「結構できるみたいだな」

ドーガスは至上の喜びを得たとばかりに、唇を卑しく舌で潤した。

「貴様、何者だ」

ヒュームが声を落として尋ねたが、ドーガスが答えるはずもない。返答の変わりに、馬を寄せてヒュームに剣を振り下ろした。

太い筋肉を余すところなく使って振り下ろされた剣は、いくらヒュームの太刀筋が優れていようと、敵うはずもない。

ヒュームは弾かれ、馬ごとよろめいた。そこで落馬しなかったただけでも、ヒュームがいかに体を鍛えていたかが分かるものである。

「ヒューム！」

リズバロルも剣を抜き、ヒュームの横に並び立った。

その時。

「ドーガス殿！」

剣を構えたウエルが、馬でドーガスとリズバロルの間に入ってきた。た。

リズバロルは間髪おらずに新しく現れた敵に対し、力を込めて剣を振り下ろす。

無論ウエルは難なくその一太刀を跳ね除けた。

ウエルの口元に鮮やかな笑みが浮かぶ。それは、リズバロルではなく、ヒュームに向けられた。

ウエルの視線と、ヒュームの視線が交錯した。

手綱を握っていたウエルの手が胸元に当てられる。

「貴様、何しにきやがった。こいつらは俺の獲物だ」

ウエルを押しどけようと、ドーガスは馬首を向き直して近付いた。ドーガスが剣を構えなおすのと、ウエルがヒュームに向かっていくのは同時だった。

ウエルは胸に片手をあて、もう一方で剣を構えて馬に跨ったまま、ヒュームのもとへと駆けた。

風が起こった。

ただの風ではない。

突風であった。

つい今し方までは、わずかでも風があれば心地よいと思われる気候であった。それが突然、ヒュームの下から竜巻のような風が巻き起こった。

総てをさらうように吹き出した風は、真っ直ぐにドーガスを馬ごと押し倒し、混戦状態にあった者達をなぎ倒した。

風は轟音を伴い、砂塵を巻き上げ、さらには紫翠の光が散光し、そこにいた者たち全員の視界と視力を奪いさる。

ウエルを追っていたシャオンも、突然の強い風に立ち止まるほかなかった。

だが、シャオンはなぎ倒されることがなかった。視界は失っていたものの、そこだけ避けて通り過ぎたかのように、シャオンは馬に跨ったままでいられた。

風が意志を持って、そうしているかのように感じられる。

ウエルのやつ。派手にやりやがって。

シャオンは一人ごちた。

たった一人で何をやらかすつもりなんだ。

確かに、片方の言い分だけを聞くことは危険極まりないことだ。

その位の事はシャオンにも理解できる。

老人と、あの若者の、どちらが二人にとっての悪か。今のところ判別する材料がない。

ウエルは老人の言う「敵」の懷に自ら飛び込んでいった。

真実を見極めるために。

神殿に残された血の臭い。それは聖なる力を持ち、神殿に近い世界にいるウエルにとっては耐え難い事実である。そこに残されていた妖獣の気配も、捨て置くことはできない。

人間を喰らう妖獣、だけは決して許せない。

信頼している。

ウエルは確かにそう言った。

シャオンの耳に、とどろく轟音に混じって、馬の蹄の音が届いた。
三頭だ。

風が次第に止んでいく。それとともに蹄の音は遠ざかって、やがて聞こえなくなった。

「何が起こったっていうんだ」

ドーガスが地面から身を起こした。

「どうやら敵さんには力を使える奴がいるみてえだぜ」

シャオンはドーガスに近付きながらあたりを見た。

惨憺たる状況であった。

若者に従っていた者達は五人ともすべて惨殺されている。馬も無事なのは一頭だけである。それも手傷を負っているのもう長くはないかもしれない。

血と、切り裂かれた肉の臭いが、漂い始めていた。

「そいつがどうやら、俺の親友を盾に連れて行ったみてえだが、さあ、どうしてくれる？」

シャオンはドーガスを見下ろしながら、出来うる限り嫌味な声で言い放った。

第三章・凋落せし名望…… 1

集落の日中は穏やかに過ぎていた。

今朝方の騒ぎがおさまると、集落の人々がどこからともなく現れ、畑で農仕事を始めた。どんな集落にも見られる日常が、ここにも当たり前に存在している。

ドーガス一行は、なんとか恐れ嚟く馬をなだめて集落に戻って来た。

集落の手前から続く畑にいた人々は、戻ってきたドーガスらを怯えた瞳で窺っている。中にはあからさまに目をそらす者さえいた。

ドーガスの顔は怒りに歪んでいた。頬を紅潮させ、奥歯を噛み締めている。ひとたび目でも合おうものなら、怒りの炎で焼き尽くされそうである。

一行の目的は敵の全滅だった。それが全滅どころか二人に逃げられ人質までとられたとあっては、ドーガスの面目は丸つぶれだ。

ウェルが人質になりえるかどうか、それは問題ではない。この集落がドーガス達の拠点であることを、ウェルが知っていることこそ問題なのである。

シャオンは一行の最後尾で、やや遅れて馬で戻った。

これからどうなるのか、どう対応するべきなのか、シャオンの頭には今の所何もなかった。こういう事を考えるのは主にウェルの役目であったし、シャオンはいつも任せていればよかった。

俺にどうしろってんだ？ 全く、ウェルの奴。

今のところ、悪態をつく他にすることがない。

あるとき咄嗟とはいえ、突如として起こった風が敵の仕業であることをドーガスに印象付けることに、いちおう成功したとは思っている。

だが、それがあの老人とナダエルに通じるかどうかは、大きな問題であった。

何でも正直に顔に出るシャオンには、このようなかけ引きは最も苦手とするところだ。

反対にウエルが、あの目付きの鋭い男とリズバロールと呼ばれていた若者に敵と勘違いされているのではないかと心配になる。しかしながら、シャオンが知る限り、ウエルが誰かに剣の腕で負けるなどということは有り得ない。ウエルの持つ聖なる力が、並みではないことを誰より知っているのも自分自身だ。たとえ敵と思われ問答無用で斬りつけられたとしても、ウエルが殺られるなどとはシャオンには想像もできなかった。

とりあえずは、あのジイさんの正体を見極めるってことだな、ウエル。それからここを出るとするか……。

「どうしたんだい！」

ナダエルが戻った一行を出迎えた。

どんな集落にも一人位はいそうな、面倒見のいい気のよさそうな婦人といった体で、ナダエルは声をかけてくる。

その穏やかさに、シャオンもいつい騙されそうになる。

爺さんと、この女には要注意だ。

自分に言い含めているシャオンの顔は、誰が見ても険しい。

ナダエルのほうも怒りのあらわなドーガスと陰相のシャオンに、すぐに気付いた様子だった。

「失敗した。公に、直接話す。通してくれ。おい、お前も来るんだよ、化け物」

ドーガスは顎でシャオンを指し示した。

「誰が化け物なんだよ、名前で呼べ、この野郎」

馬の手綱を仲間の一人に渡して、シャオンはナダエルとドーガスについて家に入った。

第三章・凋落せし名望……2

「じゃあ、あのウエルとかいう綺麗なほうが捕まったっていうのかい？」

何で俺が化け物で、ウエルが綺麗なほう、なんだ。

シャオンはすでに慣れたこととはいえ、あらためて苛立ちを感じた。確かにウエルは犯しがたい気品があつて、端正な顔立ちは道行く女たちの視線をつかむ。光がこぼれ落ちる黄金の髪は、シャオンですら目を奪われるほどだ。対してシャオンは、顔の左をえぐられ、ふためと陽の目を見ることのできない人相に違いない。けれどその言われように気分がよかるうはずがない。

ナダエルはドーガスとシャオンを家の奥へと通した。出かける前に話をした食堂とは別の、もう一つ奥の部屋だ。食堂から二階に上がれるようになっていて、奥は厨になっている。厨と反対側の部屋はシャオンにとって、入るのは初めてであつた。

普通の三倍の厚みはある扉をナダエルは身体全体をつかつて押し開け、二人を通したあと、また両手と体を使って重い音をたてながら閉めた。

部屋には、窓がなかった。

昼間だというのに蝋燭が灯されている。扉を閉めると、外の明かりを失つて薄暗くなった。

小さな机と長椅子が三つ置かれただけで、九人も座れば窮屈に感じるほどの狭さである。

シャオンは物珍しそうに部屋を見渡した。

こういう部屋の使い道はたいてい決まっている。密談をする以外に、こんな重装備な部屋は必要ない。

「さあ、座って待っていておくれ。すぐにいらっしゃるから　で？」

ナダエルはシャオンを見た。

もうすでに優しいなナダエルではなく、剣を振るってもおかしくないような険のある瞳に変わっていた。まるで集落の中にいる時の穏かそうなナダエルが演技だともいいただ。

「おまえ、何をやらかしたんだい？」

「なんでそこで俺の顔を見るんだよ」

「あんたを信用してないからさ。ドーガスとは違うからね。こんなことは初めてだよ」

シャオンは思わずナダエルを睨んでいた。

「別に好きで手伝ったんじゃないねえ。契約だったんだろうが。それに迷惑なことになってんのはこっちだぜ。おめえらが何をやってんのか、襲ったあいつらが何者なのか、ちゃんと話してもらうからな」

シャオンは我ながら巧く言ったと内心ほくそ笑みながら、出来るだけ尊大に長椅子の中央に腰をおろして足を組んだ。

ここは有利に話を進めよう。ウエルを取り戻すために、あの敵が何者なのか、俺も知っておく必要があるそうだな。

薄闇の中でドーガスが舌打ちしながら椅子に座るのが見えた。

しばらくして再び重い扉が開いた。

ゆつくりと老人が入ってくる。金の杖を持ち、出かける前と同じ滑らかな絹を身にまとっていた。

同時にドーガスが立ち上がって跪き、ナダエルまで深々と腰を折った。

老人は今まで見せなかったような憤然とした表情で、毒々しい笑みを漏らした。そのまま長椅子に腰掛けもせず、シャオンの前に老人とも思えぬ機敏な動きで歩み出た。

床に杖を突く。杖の先に付いた装飾の輪が涼しい音をたてて鳴った。

「何が起こった」

シャオンが老人を見上げる形になった。

初めて間近で見た老人の肌は、どこか艶があった。確かに目元や口元には深いしわがあり、顔色は不健康そうで、髪はすべて白くな

っている。杖をつきながら弱々しく立つ姿は、どう見ても六十は軽く超して見える。だがこうして近くで見あげると様子が少し違っていた。

「詳しく説明せぬか」

冷えた瞳がシャオンの言葉を封じてしまう。口調や声の張りまでもが、先程までとは全く別人に感じられたからだ。

考えてみれば、老人が歩く姿を見るのは初めてだった。間近で接するのも、もちろんまともに会話をするのも、である。老人は返答しないシャオンに容赦なく畳み掛けた。

「貴様、なぜ何も言わぬ」

「……公、わたくしめが」

ドーガスが深く頭を下げたまま言った。

「うむ」

「リズバロルを斬ろうと致しましたところ、突風が吹き、我々は吹き飛ばされてしまいました。あれは　あの風はとても自然に起こったものではございません」

「自然に起こったものではないと？」

「御意」

老人の顔が瞬時に嬉々としたものに变化したのは、まさしくその時であった。

「わたくしも初めはその風が一体何なのか判りかねましたが、その化け物が、こう申しました。敵の中に聖なる力を使える者がいるのだと」

頭を上げたドーガスはシャオンをちらりと横目で見た。

老人がシャオンに視線を戻した。刺すような、鋭い視線であった。シャオンは胸の音を耳元で聞きながら、臆するものかと奥歯を噛んだ。

「何だよ、なんか文句あるかよ」

「それで近くにいた化け物の仲間がともに消えたのでございます」

ドーガスは言い終えると再び頭を下げた。

シャオンは心臓が、徐々に鼓動の速度をあげるのを感じていた。
老人は笑壺に入ったように口元を綻ばせた。

「こうなった以上、貴様がリスバロルの配下だとも言い切れぬのでな。だいいちなぜ、その風を聖霊の力だと思った？」

「ちよつと待てよ。迷惑してんのはこつちだぜ。俺たちは旅の途中だつたんだぞ」

「旅？ どこへ？」

「ギユフロスだよ。ウエルがその神殿の」

言つたあとで、シャオンは死ぬほど後悔した。

聖なる力を持つ者のほとんどは神殿管轄下におかれて神官となり、神に仕えることになっている。無論、力を持つ者は極わずかであるので、神官のほとんどは神殿に付随する学問所を修業した者である。ギユフロスでは特別に、力を持つ神官のことを賢者と呼んで区別していると聞いたことがあつた。

ウエルの聖なる力のことを隠そうとするシャオンは、つい神殿という言葉に異常に反応してしまつていた。

はつと息を呑むシャオンを、老人は見逃さなかつた。

「神殿？ あやつは神官だと申すか」

「んなことは関係ねえだろうよ。とにかくよ、俺は仕事から妖獣だつて斬つてきたし、力だつて目の当たりにしたことがあるんだよ。文句あつかよ」

目いっぱい開き直つて大きく腕を組み、足も組みなおしてみた。ウエルが力を使ったことだけは、絶対に隠さなくてはならない。シャオンはウエルに強く言い聞かされたことをしっかりと思い出す。意に反して老人は笑みを深くした。

「ギユフロス……あれの名は？」

「ウエル」

「呼び名ではない。家名を聞いておる」

「知らねえ」

「まあ、よかるう。ドーガス」

老人はシャオンに興味を失ったように背を向け、ドーガスのもとに歩み寄った。

ドーガスは頭を下げたまま、老人の言葉を待っている。

「リズバロールが持つのか、やつの配下にいるヒュームが持つのか、まあ、二人を捕らえて差し出すとしよう。できるか？」

ドーガスは困惑したような表情を隠さずに小首を傾げた。

「手の者が足りますかどうか」

「よい、力をお借りする。すぐに生け贄の用意をせよ」

ドーガスは頭を下げ、立ち上がってシャオンを一瞥すらせずに重い扉を開けた。

「ナダエル」

「はい」

老人はシャオンを見やると、顎をしゃくって言った。

「これをまた屋根裏にでも押し込めておけ。リズバロールの手のものであると不味い。まだ殺してはならぬぞ。聞きたいことがあるでな」

最後まで言い終わる前に、老人は足を前に出していた。

老人が部屋を出るのを待っていたかのように、ナダエルがシャオンに近付いてきた。

「あんた、本当に何をやらかしたんだい？」

シャオンは気の毒そうに問うナダエルを睨みつけた。

「こつちが聞きたいんだよ。こういう扱いすんなら、何で俺たちを雇ったりしたんだ」

ナダエルは小さな声を立てて笑った。

「何が可笑しいんだ」

「分からないのかい？」

「なんだよ」

ナダエルは急に笑みをおさめ、シャオンの腕を取って立たせた。

「さあ、上に行くんだよ。教えて欲しいかい？ あんた達が見なくていいものを見たからだよ。まだ分からないかい？ あんた達は見た。あの建物の中を。言われもしないのにねえ。そんな怪しい奴

を、黙って帰せると思ukai?」

立ち上がったシャオンの背を押して、外に出るように促すと、ナダエルは声を落とした。

「試されたんだよ。あんた達がどっち側の人間かをね。それで見事に期待を裏切ったわけだ、あんたは。あっち側かもしれないって、思われたんだよ」

シャオンは何も言えなかった。

ナダエルの、どこか狂ったような響きのある声音が、シャオンの背筋を寒くした。

シャオンは今ほど、ウエルの存在の大きさを感じたことはなかった。

たった一人で敵のただ中に残されたからではない。こんな時ウエルならば、もつと違う対応をし、何らかの手がかりとなる情報の一つや二つ、引き出していたであろうと思う。

現にウエルは真実を言い当てていた。あの晩に見た妖しい建物が、総ての発端であることを。

老人とナダエルとドーガスの狂気だけを明確に感じて、シャオンは一人、恐怖した。

第三章・凋落せし名望…… 3

三頭の馬が一本道をまっすぐに駆け抜けていた。

周囲はたわわに実った果実と豊かな穂をしだらせる畑だ。それを高い山が見下ろしている。

襲われた橋からしばらく駆けて、次の集落が見えてきた所でリスバロルは馬の足を止めた。

リスバロルとヒュームの間に挟まれるようにして走っていたウェルも、それに倣った。

ウェルは後ろを振り返って小さく息をついてから、リスバロルに向き直った。

「どうやら追っては来ないようですよ」

「当たり前だ。深追いしては、捕らえられて首謀者の名を吐かせられることになる。その程度のことだから知らない輩なら、当の昔にこの一件は終わっている」

リスバロルは腹立たしげに言いながらウェルを見返した。

馬の首を優しく撫ぜ、口元にわずかながらの柔らかな笑みを湛える人間。敵と共に現れながら、不思議な風を起こし、リスバロルとヒュームを逃がした不可解な行動をおこす者。

リスバロルは馬上で剣の柄を握り締めながら、威嚇するように睨んだ。

「お前は誰だ、説明しろ。返答しだいでは斬る」

「今、ここで、でございますか」

ウェルの言い草は、リスバロルの自尊心を逆なでするに十分な響きと余裕があった。思わず腰の剣を抜きかけたリスバロルを制したのは、ヒュームであった。

「その通りでございますよ。リスバロル様。彼は私と同じ聖なる力を持つ者。どうやら我らに害を為すつもりはなさそうです」

「では、あの風は」

ヒュームは静かに頷いた。

「残念ながら、私の力は聖霊が見える程度ですから」

ヒュームは細い目を更に眇めて、ウエルに向き直った。

「はじめて見ました。あのように聖霊が狂喜乱舞するところを」

「そうでしたか」

ウエルは薄い笑みを、ほんの少し深くした。

「貴方が力をお持ちなのに気付いて、少々利用させて頂きました。

彼らが力に気付いても、貴方が持っているように見せかけたつもりですが……何しろ私は今どんな陰謀に巻き込まれているのか、全く分からずにいるものですからね」

リスバロルは、あるのかないのかすら疑いたくなるようなウエルの倜然たる笑みに、思わず目を奪われていた。

落ち着きを取り戻したリスバロルの網膜が、初めてウエルの顔をとらえた。

「そなた、名は？」

「ウエル、とお呼び下さいませ」

「それだけでは判らぬ。私はリスバロル・クラウスⅡギヤロバル。現ギヤロバル領主カトラスロの一子だ。名とはそのように答えるものだ」

ウエルが困ったように首を傾げた。

「似ているとは思わぬか、ヒューム」

「フェアリル様ですか？」

ウエルに視線を固定したまま、リスバロルが頷く。

「ともかく彼から詳しい話を聞きましょう。私共がこの領地に入っ
てすぐに襲われたことと、きっと関係があるのでしょうか」

一行はそのまま次の集落に入っていた。

ギヤロバル領・ルンダス。ギヤロバル公が統治する領土の中心、

領主館の存在する街である。

現在、領主代行として采配をふるうのは、行政長官ザインだ。

アキロとシェバ帝国グリュック自治区との国境を有する最南端の

ギヤロバル領唯一の街がルンダスである。

しかし、そこは領内唯一の街とはとうてい言い難い所であった。集落となんら変わりのない、平屋の木造家屋。それらが寄り添うように立ち並び、街道は十分といえるほどには広くなく、街にある華やかさがない。中心部に進むにつれ家屋は密集し、露店や商店などが見られ始めたが、店の棚には商品が閑散とした状態で、無論、露店商などは片手で数にあまる程度だ。

道行く者の身形もとても裕福とは言えない。

裏路地には家を失って座り込む者もいる。盗みを働き追われる者、やせた子供。

アキロが隣国シェバ帝国グリュック自治区から物資の多くを断たれ、すでに十五年。王都はともかく、そこから離れれば離れるほど影響が大きくなっているようであった。

「先だつて通つた時はここが中心だとは思いませんでした」
ウエルはそうリズバロールに感想を述べた。

「全くだ」

リズバロールも驚きを隠そうとはしなかった。

「だが都も大して変わりはない」

そうは言つたものの、これが近い将来自分が治める領土の中心であると知つた衝撃は大きかった。領主はほとんど王都から出ることがない。古くからのアキロ公国の慣わしでもある。

バスジル公王城を中心に栄える都は、幾分かここよりは栄えている。

店には品物が並んでいたし、道行く者も身形のいい公族達が臣下が多い。商人達もそれなりに活気に満ち溢れていた。

それに比べてルンダスはどうかであろう。この著しい貧富の差を、一体どう説明すればいいのかりズバロールには分からなかった。

程なくして三人は領主館に到着した。これも二階建てではあったが、堅牢な石造りというわけでなく、蔦が絡んだ部分もある。民家よりは多少立派な古い別宅とも言える建物だった。

リズバロルら三人は、いかにも凡庸そうな行政長官のザインに迎えられた。ザインはどこか困ったように汗を拭きながら、おどおどとした様子でリズバロルを案内した。

一同は館の中の一室によく落ち着いた。

部屋も領主が使用しているとは思えないほど質素であった。絵画ひとつ、壁にはない。

「で、ウエルとやら、聞くが我々を襲った敵は誰だ？」

ウエルを立たせたまま、悠々と椅子に腰掛けたリズバロルは挑むように問うた。

「わかりません」

「なに？」

ウエルの表情は微かに笑みを湛えたまま一向に動かない。リズバロルは腹立たしそうに唇を噛んだ。

「ですから、私もそれを知りたいと思っていますのです。私の見たものは、齢六十はゆうに過ぎた老人、四十前と思われる女性、先ほどの巨漢の男。雇われた傭兵と思われる多くの者。まあ、私もその一人です」

「六十過ぎの、老人？」

ヒュームは首を傾げて、横に座るリズバロルを見た。

「本当に、そんなに老けているのか？ 五十位ではなかったか」

「五十？ とてもそのようには。髪はすべて白くなっておりまして、顔にはしわが深く見えました」

リズバロルにはウエルと名乗った青年が嘘をついているとは思えなかった。ヒュームには確かに聖霊を見る力があり、絶対的信頼を置く彼がどうやらウエルを敵とはみなしていない様子だ。それにあの時、ウエルの放った風がなかったら、あの大男の剣で怪我をしていたかもしれない。

リズバロルは腕を組み、考え込んだ。

代わりにヒュームが、問いを続けた。

「ウエル殿。貴殿は何故、危険を冒してまで我々のほうへ来られた

のですか」

「あちらでは真実が見えないからです。老人を捕らえ、仮に拷問にかけたとしても、口を割りそうにありませんでしたから」

ウエルは恐るべき言葉をまるで冗談を言うような軽さで話し、そこで初めて口元の笑みを消した。

一気に温和さが消失し、冷涼とした雰囲気が取って代わる。声を落とし、リズバロールのもとに数歩近付いて言った。

「彼らのそばには妖獣がいます」

ヒュームとリズバロールはウエルの言葉に息を呑んだ。

「見たと、おっしゃいますか？」

「見たわけではありません。しかし、痕跡は残っていました」

「闇の力が？」

「そうです」

ヒュームは息をついて、椅子に深く腰をかけなおした。

「リズバロール様。それで話が少し繋がりましたな」

「しかし……」

リズバロールは短な金の髪を苛々と掻きながら、ヒュームを見上げた。

ヒュームは黙って頷くと、ウエルに向き直った。

「お話ししましょう。きっと、私とあなたの話は繋がるはずだ」

「ぜひ」

第三章・凋落せし名望…… 4

ヒュームは一息つくと、ウエルにも椅子を勧めた。ウエルが腰掛けたのを確認してからヒュームは言った。

「十年前にギャロバル公カトラス口様に領土が譲与されるより前、ここはグインシャル公の領地でした。グインシャル公フアズロガスきつとそれがその老人の名ではないかと思われます」

「なぜ断定できるのです？」

ウエルの問いにヒュームはリズバロルを見やった。まるで口にするのを躊躇うかのように瞳を閉じる。ヒュームの代わりにリズバロルが続きを話し出した。

「王都に流れる噂だ……フアズロガスがギャロバル一族を滅ぼそうとしていると噂になっている。十年前、フアズロガスを告発したのが父上だからだ。奴はアキロをシェバ帝国に売ろうとしていたのだ。現にシェバ帝国と通じていた。結局は公王の信頼を失い失脚したが……十年前、我がギャロバル一族とアキロを滅ぼすという呪いの言葉を残して、消えた」

リズバロルは余憤を吐き出すかのように早口になっていた。

「この領地で我がギャロバルに復讐するためにフアズロガスが甦り、邪教を蔓延させていると、まことしやかに王都で囁かれているのだ。王都では名のある名家の女が何人もいなくなり、五公はいずれも夜盗に襲われて金品を奪われた。それらすべて、ギャロバルに潜伏する悪鬼の仕業と囁かれている。バスジル公王の探索の手を逃れて、いまだに捕えることすらできずにいる」

「なるほど」

ウエルは小さく頷きながら、リズバロルとヒュームを交互に見た。

「この先に、過去に大火に襲われたような朽ちた集落があります。その神殿らしき建物には血の臭いと妖獣の痕跡が、復興された様な集落には、雇われた兵が。そして老人はかなり金品を所持してい

る様子でした」

一同は沈黙した。

ウエルの話とリスバロルの話には結びつく点が多い。昔、ギャロバル領を支配していたファズログスが失脚させられたことを怨みに思い、復讐を果たそうとしているのだと考えれば辻褄は合う。悪事を働いておいて、すべてをギャロバルになすりつけるような噂を王都に流す。そうすればギャロバルの立場は悪くなり、無実を晴らすためには立ち上がらざるを得なくなる。領主が王都に住むことが慣例のアキロでは、警備の厳重な場所から狙う主を引っ張り出すには騒動を起こす他はない。

その朽ちた集落にいる老人が、グインシャル公ファズログスであるとするならば、である。

しかしこの時点で、それを断定することは出来なかった。

グインシャル公ファズログス。

真実それが老人の名であるとして、いなくなった女達と、神殿の血の臭い、妖獣、そして邪教。それらを繋げる証拠を、三人は持ち合わせてはいなかった。

なぜ朽ちた神殿に妖獣がいるのか。老人が妖獣とどのように繋がっているのか。それすらも分からない。

ただファズログスがリスバロル、つまりギャロバル領主の継嗣を襲ったという事実だけは確かなようだった。

「噂どおりファズログスは生きている。それだけは確からしいな。そして私を亡き者にしようとした」

リスバロルはそう呟いて椅子から立ちあがり、ウエルを指差した。「それでお前だ。なぜ、お前がファズログスの所にいるのだ。なぜ関わっている？」

ウエルは責めたてるようなリスバロルの声にも動じる様子がなかった。

冷然とした顔にまた薄い笑みが戻る。

「私達はグリユックからギュフロスへの旅の途中でした。そこで老

人に声をかけられたのです。お前は真つ当ではないだろうから仕事をしないか、と。確かにそうです。私と、私の仲間はいろんな仕事を受けながら旅をしているのですからね。老人はそうやって、金に物を言わせて何人もの人間を集めているらしいのです」

ウエルの声は、悪戯を楽しむ子供のように弾んで聞こえた。

「ただ」

ウエルは顎を引いて、真つ直ぐにリズバロールを見た。

「私は妖獣を使う人間は許せない。絶対に。それだけですよ」

途端に冷えた声音になったウエルに、リズバロールは慄然とした。

口元に優しげな笑みを湛えたままであるから余計に背筋に冷たいものが走る。

「ギユフロスのどちらへ？」

ヒュームの問いにウエルは笑みを深くし、首筋に手を当てた。胸元から細い革紐を出す。革紐の先には小さな赤子の手ほどの袋がついていた。

それを見た途端ヒュームは眩しげに手をかざした。

「それは……」

「ギユフロスの大賢者様からお借りした、聖なる石です。古に伝わる大聖者ヴァルテミオス卿のお力を封印したと伝えられています。これをお返しに行く途中なのですよ。私には身に余る石ですので、いつまでも持つていてはいけないと思ひまして」

リズバロールには、何の変哲もない麻袋に見えた。

しかしヒュームはその中に忍んでいる石の力を見ている様子だった。

「御覧になりますか？」

「ぜひに」

身を乗り出したヒュームに、ウエルはその麻袋の口を開いた。

中から紫翠の色彩に彩られた楕円形の石がウエルの掌に転がり出る。

ヒュームは眩しそうに手をかざしている。リズバロールはそれを不

思議そうに見ていた。

「何という輝き。光の聖霊があふれ出たようですな」

ウエルは笑みを深くすると、石を麻袋に戻し、また胸元に仕舞った。

「私は幼い頃からギュフロスの賢者塔で学びました。妖獣に関してはそれなりに知識もあります。妖獣は危険です。心に深い闇を持つ者が近付けば、心を喰われて体に乗っ取られることすらあります。ですからもし、そのファズロガスという者がギャロバル公一族に復讐しようとしているなら、その心根を妖獣は歓迎し利用しようとするでしょう」

「妖獣とファズロガスが手を組んでいるというのか」

リスバロルは信じられないという風に首を横に振った。

「それはどうでしょうか。妖獣がそこまでファズロガスに手を貸すには、それなりの条件が必要になるでしょう」

「条件？」

「そうです。妖獣にとって、有利な条件。強い妖獣が最も手に入りたいのは、聖なる力を持った人間、つまり、最高の餌です」

妖獣は聖なる力を手にする人間を喰らうと寿命が延び、聖なる力を取り込んで妖力を増すことが出来ると言われていた。

低俗な妖獣は家畜を襲って餌にするだけですむ。高い知能を持つ人間を襲って喰らうには、それなりの力が必要だ。武器を持って戦おうとする人間を無力に出来るような、強い妖力が。

最も強い闇の聖霊を共とする、聖なる力に反する妖力を持つ妖獣。強い力を持つ妖獣だけが人間を喰らうことができる。

リスバロルは深い溜息をついて再び腰をおろし、椅子に背を預けた。

アキロの王・バスジル公王は、王都でまことしやかに噂されるグインシャル公ファズロガスの復讐に何の対応もしない。生きているのか死んでいるのかすらはつきりしない人間の噂を公王が鵜呑みにするわけにもいかない。更に言えば、そのようなことで公王の兵

を動かすわけにもいかない。隣国、グリユックにはシェバ帝国があり、北にはギユフロスがある。

全てをギャロバルの所為にしようと、公王は調査を命じてきた。十年前に死んだとされているファズログスの存命を確認し、噂を消せと。

都に蔓延る強盗、さらわれていく女達、ギャロバルにはびこる邪教を民人が信仰し、それを放置しているという、すべてがギャロバルの不始末であるかのごとき噂。

じつとしていられなくて王都を飛び出し、領内を見聞するために来たところ、そうそうに襲われたわけだ。

まるでこの日を待っていたかのように、即日。

「どうやら、お話を伺うに、これはたいへん根が深そうですね」

ウエルが疲れた表情を見せるリズバロルを気遣うように声をかけてきた。

その氣使いが、ふと、似た顔と重なって見えて、リズバロルは首を横に振った。

「とにかく、その集落とやらを探ってみようではないか。力を貸してくれるのだな、ウエルとやら」

リズバロルの言葉に、ウエルは秀麗に微笑を返した。

「私はそのためにこちらに参ったのです」

ウエルの微笑の奥に底知れぬ力と英知を感じて、リズバロルは心持ち安堵を感じ、目を閉じた。

第四章・生け贄の女神…… 1

シャオンは瞳を閉じて胡坐をかき、身じろぎ一つせずにいる。もちろん剣はない。

ナダエルの住まいである家の二階にシャオンは閉じ込められていた。窓が一つしかない、例の屋根裏のような部屋だ。

蝋燭が燭台の上でくすぶった。

外はすでに月明かりだけが辺りを照らし出す夜になっていた。

毛布を一枚与えられただけで、部屋には何も無い。その中央にシャオンはじつと座っているのである。

扉の向こうと窓の下には、それぞれ二人の人間の気配がある。

シャオンの感覚はいつになく研ぎ澄まされていた。

人間とは思えぬ鋭い聴覚と獣並みの嗅覚を、シャオンは今、生れて初めて全開に解き放っている。

普段はなるべく聞かず、臭わずを心がけていた。意識すれば、聴覚も嗅覚もいずれもその能力に蓋をし、抑えることができる。普通の人間のように振る舞う癖は自然と身についたものだ。

自分の力をどこまで解放できるのか、分からない。

シャオンを支える言葉は、たった一つ。

信頼している。

ウエルの言葉だ。

シャオンは大きく息を吸って、それから辺りの空気を意識した。ウエルのことをふと考えた意識を、再び空気に溶け込ませていく。体の輪郭が崩れ落ちてなくなっていくかのように、シャオンの意識は解き放たれた。

ナダエルの家のどんな些細な音ですら、いまのシャオンの耳ならば捉えることができる。

昼過ぎにここに閉じ込められてから人の出入りはなくなった。ナダエルが出たり入ったりする以外は、誰も訪ねてこない。外の気配

も同じであつた。集落の人間も、どうやら近辺の畑に出ているらしく人影が薄い。

一階の入口のあたりでまた扉が開いた。

少し軽い、歩幅の小さな足音。

ナダエルだ。

足音はそのまま外の雑草を踏み、家から離れていく。どうやら真つ直ぐに進んでいるらしい。

シャオンは目を見開き、立ち上がって窓から外を覗きこんだ。

薄い月明かりに照らされて、朽ち果てた神殿に近付いていくナダエルが見える。

「こんな夜更けに……」

シャオンは窓をそつと開けて下を見おろした。見張りの人間は眠そつに目を擦り、一人はうなだれている。

すばやく窓の下に目をやると、ちょうど爪先が乗るくらいの出っ張りがあつた。足をかけて、うまく外へ出ることができそうだ。

シャオンは迷わずかまち框を跨いだ。出っ張りをつたいながら、見張りがいる正面を避け、横手に回つて下に飛び降りた。着地するとき、微かに草を踏む物音を立ててしまったが、居眠りをする見張りは気付いていない様子だつた。

見張りはナダエルが言つた五人の仲間とは違つ、雇われた者に違いない。名ばかりの見張りで助かつたと胸を撫で下ろしながら、シャオンは駆け出した。家の横手を大きく迂回し、隣の家を回つて神殿を窺う。

ちょうどナダエルが、朽ちた神殿の正面よりやや左の位置で立ち止まっていた所だつた。

二枚の扉の周辺にある、飾りの彫刻のすぐ隣だ。

暫く佇んでいたナダエルは、何を思つたか足を数歩後ろに引いた。その瞬間、あるうことか石で出来た壁が澱んで歪んだ。いや、歪んで見えた。その澱みは黒く、石の壁に墨を流し込んで掻き回したように見える。ぐにやりと歪んだ壁は、やがて漆黒の空間へと変わ

った。

シャオンは思わず声を出しそうになったのを、どうにか寸での所で堪えた。

ナダエルが迷わず中へ入って行く。

石の壁の中へナダエルが入っていくのを、シャオンは息を呑んで見ていた。一瞬の迷いの後、シャオンは神殿へと駆け出していた。

だが、シャオンがナダエルの消えた壁に辿り着いた時には、すでにただの石の壁に戻っていた。

苔が張り付き、所々煤けたような焦げがつく、白い石の壁に。

部屋は冷たい石に囲まれていた。

湿気た匂いが鼻につき、まとわりつく粘着質な空気が肌に吸着してくるようだ。息を吸うだけで肺胞の隅々まで菌に侵されそうな不健康な空気が澀む。

老人が一人住まうに十分な、必要最低限のものだけが揃っている。

「ナダエルか？」

老人は人の気配に顔を上げた。机の上におかれた蠟燭が、老人の顔に深い影を落としている。

「ドーガスが王都に出立していますわ」

「ふむ。して、いけそうか」

ナダエルは腰掛けている老人の横に跪いた。

「首尾よく行けば、早朝には。明日、儀式を行えるかと」

老人はナダエルの言葉を聞きながら笑っていた。

瞳には何も映っておらず、世に存在しえぬものを写したような虚ろな色を湛えている。

「同じ苦しみを味わうがいい」

喉の奥で、笑みがもれた。堪えるように、かつ、楽しそうに。

「ギャロバル、カトラス口……苦しめ。息子を失い、そして公家から嫁した姫を殺し、追い詰められるがいい……」

堪えきれないという風に、声はやがて口から高らかな笑い声となつて飛び出した。

石の壁に冷ややかに反響する笑い声が、幾重にも重なって部屋に充満していった。

第四章・生け贄の女神……2

「それで、か」

シャオンはナダエルが消えた石の壁を指で押してみた。

もちろんそんなことで動くはずもない。軋む音すらたてない壁のからくりは、シャオンには解らない。

どうりで足音がないはずだ。

あの時。

シャオンが黒い鳥の像を見付けてウエルを呼んだ時。ナダエルがこの壁から出てきたのだとすれば、シャオンが気付かなかったはずだ。石の壁から出ればすぐ隣が朽ちた神殿の扉だ。ほとんど気配を悟られる時間をおかずに、中にいたシャオンとウエルに声をかけることが出来る。そうして見張るために、二人を自分の家に招きいれた。

よく出来た話だぜ。

シャオンは踵を返すと、先ほど身を隠していた隣の家の影に戻ってしゃがみ込んだ。

考えをまとめたかったからだ。

これからどうするか、いくつか道はある。

このままここに残る。その場合は多少の危険も覚悟しなければならいだろう。今の所、昼間に襲った敵らしき人物の仲間だと疑われているらしい。その危険も覚悟の上で、更に老人達の秘密を探ることが出来る。

もう一つ。このままウエルのもとに行くこともできる。そのほうが危険は少ないだろう。

そうすると、手土産がねえよな。

結局のところ、シャオンは老人の名前すら知らない。再び監禁されて、剣も奪われたままだ。

けれど老人は何故、あんなにウエルの名を気にするのか。

リズバロールを捕らえると言っていた。その名は昼間に聞いた敵の名前だ。そのために何と言っていた？

いけにえ？

シャオンは背筋が寒くなった。想像するにも恐ろしい考えが頭をよぎったからだ。

生け贄、をどうするのか。廃墟のような神殿の中に充満する多くの血の臭い。その意味するものが、それ以外にあるだろうか。

誰に生け贄を捧げているって？

シャオンは立ち上がった。家から神殿を覗き見る。意識を解き放てば、容易にそこから漂ってくる腐臭が鼻に付く。錆びたような、血の臭い。

他に考えようがない。

生け贄と称して人間を妖獣に、食わせているのか！

シャオンの耳に老人の言葉が甦った。

「力をお借りする、って言ってなかったか？」

シャオンは確かに肌が粟立つのを感じていた。夜風が冷たかったからではない。もしこの考えが当たっているならば、それは途轍もなく恐ろしいことに違いない。

あの老人が、妖獣に生け贄を捧げる代わりに、妖力を借りているのだとしたら。

そして妖力を、何かに利用しようとしている。リズバロールを捕えて妖獣に差し出すのだと言っていた。

狙いは、リズバロール。

シャオンには迷いなどなかった。

できるだけ足音を忍ばせてそっとナダエルの家に戻った。横手から、降りてきたのと同じ手順で登っていく。

そして窓を跨いで部屋に戻ると、再び音をたてずに窓を閉めた。

第四章・生け贄の女神…… 3

ギヤロバル領ルンダスの領主館で、ウエルは目覚めていた。

昨日の出来事がまるで嘘のように穏やかな朝であった。

あの橋のたもとで老人に出会わず、右の街道に進んでさえいたら、朽ちた神殿を覗きさえしなければ。今頃は王都を抜け、一路ギユフロスへと向かっていたであろう。今さら考えても仕方のないことと分かっていても、思わずにはいらなかった。

ウエルは寝台から抜け出すと窓際に立ち、胸元に手を当てた。

そこには力が満ちている。片時も離さずに身に付けている聖なる石だ。意識を集中するだけで、ウエルの周囲にいる聖霊達が騒ぎ出す。空気が動き、風が起こり、朝日が集まってウエルの輪郭を崩していく。

ウエルはふと、とつさに置き去りにしてきたシャオンのことを思い出した。

「シャオンは無事だろうか」

リズバロルの従者ヒュームに聖なる力の存在を見て取った時、ウエルの体は自然に動いていた。

ヒュームの足元から風を起こし、聖なる力を持つことを知らしめてきた。

老人がリズバロルを狙っているのは確かだ。妖獣となんらかの関係があることも。ならば必ず、聖なる力を持つ者に執着してくるだろう。妖獣は力を持つ者を欲するのだ。自らの妖力を増す力の源を。聖なる力を見せ付けておけば、必ず妖獣が姿を現す。

ウエルはそう考えていた。

しかし、静か過ぎた。

妖獣が力を持つ者にひかれて現れると思っていたウエルの予想は、今のところあっけなく覆されている。だが近いうちに、妖獣は必ずここを襲撃してくる。力に誘われて、必ず。

今は、シャオンが何かをあの集落でつかんでくれていることを祈るだけだ。

その上で合流する機会を得る。

「巧くやつてくれているといいのだけれど」

心配ではない、といえば嘘になる。

シャオンは何でも思ったことが顔に出て、かつ、気が短い所がある。すぐさま行動に出ることはウエルにしてみれば賞賛に値するところでもあるが、時にそれは危険も伴う。彼がそれを熟考するとは思えない。

けれど粗雑そうに見えるのに、人に気を遣う時の繊細さだけは、どうも理解の域を超えている。シャオンの中の脆い硝子細工のような、幼い赤子のような純粹さが危うい時もある。同時にそれがシャオンの心の強さである事もウエルにはよく分かつてはいた。

「そろそろ連絡を取らなくてはならないか……」

呟くのと時を同じくして、女官達がウエルの身支度のためにやってきた。

「ヒューム様が、お呼びでございます」

女官の一人がウエルを促した。

「朝早くから、失礼しました」

ヒュームは自室にウエルを招き、奥の椅子を勧めた。
部屋を見渡したがリズバロルの姿はない。

「リズバロル様抜きで、少し伺いたい事があつたものですから」

ヒュームは目を細めて、ウエルの前に座った。

背筋を真っ直ぐに伸ばし、いかにも融通の利かないといった雰囲気を持っている。金の髪もきちんと後ろで束ね、衣服にはしわの一つもない。

一呼吸置いて、ヒュームは尋ねた。

「一体何時、我々があの橋を通ることをお聞きになられた？」

「何時、と申されましても……私は橋に近づくまで、目標がリスバル殿であることすら知らされてはいませんでした」

ヒュームはウエルの言葉に、わずかに身を乗り出した。

「もつと言うなら、彼らの準備は完全でした。貴方がたの人数を事前に把握し、二人一組で敵に対することが出来るように、人数の用意もなされていました」

「では、やはり内通者がいるかもしれないということですね」

ウエルは小首を傾げた。あるかないかの笑みはいつものままだ。

ヒュームはウエルの返答を待っていた様子だが、小さく息を吐くと姿勢を崩し、背を椅子に預けた。口元に手をあて、なにやら熟考しつつ言葉を選んでいくのようだった。

「昨日、バスジル王都を出てこちらに向かうことになったのは、その日の朝だったのです。朝、バスジル公王から、ギュフロスの変事はギュフロスで始末をつけるように厳令が下されまして、お怒りになったりズバル様が飛び出されたのです。それでなんとか五人の者を集めてまいった、という訳だったのですが」

「朝？」

「そうです。ですからこんなにも早く襲撃を受けるとは、考えもいませんでした」

「たしかに」

ヒュームは鋭い光を細い眼に宿らせて、ウエルを見据えた。

「ヒューム殿、私もそのことについては考えていました。しかし内通者というのも説明がつかない。朝、急に出立が決まったとして、それをあの老人の耳に入れて準備し、昼にあなた方を襲撃するにはあまりに時間が短すぎます」

「では、一体どうやって情報を得たのでしょうか？」

「今は分かりかねます。可能性があるとすれば、妖獣」

全く表情を変えずに飄々として見えるウエルに、ヒュームは眉を寄せ、また身を乗り出した。

「貴方を信じたい気持ちはあります。ウエル殿の持たれる力は本物

ですし、ましてやギユフロスの神殿におられた様子で、そのようなお方がファズロガス公の悪事に手を貸していると考えたくはありません」

ウエルはなおも表情を変えなかった。それを見て、さらにヒュームは険相になっていった。

「何故、何も言わないのですか？」

ヒュームの剣のこもった声に、ウエルは薄い笑みをいつものように深くした。

「ヒューム殿が私を疑われるのはもつともです。はつきりおっしゃったら如何です？　いつお聞きになるのかと、私は待っていたのです。貴方は見たはずだ。私の隣にいた黒髪の男が、黒い影を背負っていたと」

ヒュームは細い目を見開いていた。虚を突かれたとでも言わぬばかりに体を強張らせたが、それもひと時のことであつた。

「あれは貴方の仲間ですか」

「そうですよ。私の最も信頼している友人です」

ヒュームはウエルの胸ぐらに掴み掛かる勢いで立ち上がった。

ウエルは真つ直ぐにヒュームの目を見上げていた。嘘偽りを許さぬ真摯な青い瞳で。ヒュームはその姿に、たじろいだように言葉につまっていた。しばし、泳ぐ瞳が宙を迷い、それでも強い意思だけは失わず、ヒュームは小さく咳払いをしてから問うた。

「しかし彼は普通ではなかった。妖獣でもなく、人間でもない。人間の姿をしているのに、妖獣の影を背負っている」

ヒュームは首を横に振った。

「いや、私の力は弱い。はつきりとは分からないのですよ、ウエル殿」

「聞いてどうなさいます？」

ヒュームはすぐには返答しなかった。

ウエルは仕方がないという風にわずかに肩を竦めた。

聖霊を見る力を持つ者には隠すことができない。人間がまとう、

神より受け継ぐ聖霊と同じ魂の光は決して隠せない。見ようとすれば必ず目に留まる。

あの時、ヒュームはウエルの方を見破るのと同時に、シャオンの光をも見てしまったのだ。

しかしその動揺を、主人であるリズバロルの前では決して見せなかった。

「意地悪な言い方でしたね。別に隠すことはありません。彼、シャオンもそう言うでしょう」

ウエルは立ち上がった。肩から黄金の髪が零れ落ち、衣擦れの音がした。ウエルの立ち上がる仕草一つとってみても、常人ならざる品格と優美さは隠しきれない。

ヒュームは溜め息でもつきそうな顔でその仕草を見ていた。

「シャオンは、妖獣と人間の間に生れた、いわば混血です。人間でありながら、妖獣の力を備えているのです。それだけのことです。

納得がいきましたか？」

第四章・生け贄の女神…… 4

ナダエルの家の上階に、朝日が差し込んできた。

昨日と同じ、この屋根裏のような部屋で目覚めた。毛布だけで床の上に座って眠る。二日もそうしていれば、体はやはり軋んで痛む。立ち上がって大きく伸びをしたシャオンは、毒づくことも忘れなかった。

「くそ、ウエルのやつ、あつたかな寝台で寝てやがんだろうな」
損な役割が回ってきたものと、シャオンは舌打ちした。

昨夜、ナダエルが朽ちた神殿の石の壁の中に消え、しかもあたりには血の臭いが濃く漂っていた。妖獣の存在はもう疑う余地もない。「さて、どうしたもんかな」

相手方の動きを待つ、などという事はシャオンの性に合わない。相変わらず、扉の向こうには二人の気配がした。

今ここで飛び出して、老人を捕らえる。もしくはナダエルを捕まえて老人を脅す。いっそ、剣を奪い返して暴れるか？ 老人を捕らえて、そのままウエルのもとに走るか。

考えながらシャオンは失笑した。

どれも馬鹿な考えだ。

老人を捕まえる前に、あのドーガスという大男と剣を交えなくてはならない。たとえナダエルを人質にしても、老人はナダエルのことなどなんとも思わないかもしれない。

いずれにしても何かしらの行動を起こしたいのだが、今のところはどうかもしようのないのが現実であった。

色々と考えていたシャオンだったが、そんなことはすぐに気鬱に終わった。

シャオンの耳は、確実にナダエルの家の変異を聞き取った。

外でまずドーガスの声がした。早口なうえに小声だった。さすがに何を言っているのかははっきりしない。すぐに家の扉が開け放た

れ、何人もの足音がした。

シャオンは窓から外を見た。

女が一人寝かされていた。

人間の大きさより一回り大きな板の上に、女は死んだように横たわっている。胸が静かに上下しているので死んではないようだ。長い金の髪が板の上に広がっていた。朝日を浴びて光の粒子を辺りに巻き散らしたように艶がある。滑らかな上質に見える布をまとい、白い肌に、薄紅色の唇。今は瞳を閉じているが、顔立ちが整っているのは二階から見下ろしても分かる。

シャオンは大きく心臓が打ち鳴らされるのを感じた。

少女のように幼くも見えるその女の顔が、知った顔に似ていたからだ。

「ウエル……」

どこか、というわけではない。

外で横たわる少女の顔は、いつもそばで見ているウエルの寝顔に似ていた。どこか柔和に見える、整った美しさ。華があるのとは違う、品位のある麗しさだ。

誰だ、あれは？

シャオンに見当のつくはずもない。

ただ一つ分かることは、彼女こそが妖獣の生け贄だということだ。女が何人かの手によって、ナダエルの家に運び込まれていく。シャオンはそれをずっと見ていた。

不意にドーガスがシャオンの覗く窓を見上げた。シャオンはあわてて身を引いたが、覗いていたことを間違いなく見られただろう。これだけ鋭い視線を投げかければ、剣を使うものならば察しても当然だ。

シャオンは知らずに笑っていた。

きつと誰かが来る。

その確信は、すぐに現実となった。

シャオンはナダエルに連れられて下に降りた。

食堂には老人がひとり座っていた。後ろにはドーガスら五人の仲間という男達が、剣を左手に仁王立ちになっている。

ナダエルに椅子を勧められたが、シャオンは無視した。

「なんか用かよ」

できるだけ横柄に問うた。

老人はもうシャオンにとぼけた様子を見せなかった。真っ直ぐに背筋を伸ばし、手には金の杖を携え、獲物を狙う野生動物のような目でシャオンを見ている。

「どうか、あの男の名を、思い出してくれたか」

老人の声にも艶がある。初めに聞いた、どこか飄々とした声音も口調もない。真横に結ばれた唇にも笑みはない。

「誰のことだよ」

「まだとぼける気が。リスバロールとともに消えた神官の名だ。ウェル、というのは呼び名であろうが。そやつが我らを探るために送り込まれた刺客である事は分かっている」

「何をわけのわかんねえこと言ってるんだよ。しらねえよ。しらねえ、というか、言えねえ。あんまり難しいんだよ」

「あくまでも白を切るつもりだな。バスジルの犬め」

老人は毒々しく呟くと、ドーガスに顎で合図した。

後ろに立っていた五人が、一斉にシャオンの周りを固める。

「何だってるんだ！ ウェルの名前になんかあんのかよ」

シャオンがあまりに真っ直ぐ老人を見返して叫んだためか、老人は口の端を片方持ち上げて嘲るように笑った。

「どうやら本当に知らぬようだ。まあ、よい。もう用はない。どのみち、一気に襲えばすむことだ」

「なんだと！」

老人に掴みかかろうとしたシャオンを、男達が両脇から押さえつけた。屈強な男達に押さえられて、さすがのシャオンも身動きが取

れない。肩を振って足掻いたが、無駄に終わった。

「女と一緒にしておけ。餌にしてくれるわ。まあ、ゆっくり女と話すがいい。最後のひと時を、な」

老人はそういい残すと、ナダエルの家を後にした。

「何だつてんだ！ てめえら、狂ってる！ 離せこの野郎！」

ナダエルは何も言わずに、昨日の窓のない部屋の重い扉を開けた。
「ほら、ここで待つてな」

引きずられるようにしてシャオンは部屋に押込められ、勢い余って床に転がった。

「こら、なにを」

シャオンが扉に飛び掛ろうとしたときには、すでに閉じられた後であつた。

長椅子のひとつに、さつき二階から覗いた板の上に寝かされていた女、いや少女がいる。

静かに寝息を立てる少女を間近で見ると、ますますウエルに似ていた。

「全く、何だつてんだ。もうさっぱりわかんねえや」

シャオンは胡坐をかいて、少女の前に座り込んだ。

同じ頃、ギャロバル領ルンダスの領主館には風雲急を告げる使者が到着しようとしていた。

バスジル公王領、王都からの使者は、行政長官のザインではなくリスバロルへ直に伝えたいと言って引かなかった。

リスバロルはちょうど、ヒュームとウエル、ザインらと机を囲み、ファズログスのいると思われる集落の調査について話をしている最中であつた。

王都での妙な噂とウエルの話を考え合わせると、その集落がファズログスの拠点であり、ギャロバル公への復讐を目論んでいる事は、揺ぎ無い事実のようである。そこに妖獣の存在もあり、またどのよ

うな復讐を考えているのかも不明で、事態は混迷の様相を呈していた。

リズバロルはすぐにも老人が潜んでいると思われる集落に人を遣り探る腹積もりであった。ところが、このギャロバル領ルンダスには肝心の人材がない。集落を囲み、老人をいぶりだし、中を調査するだけの頭数を揃えることが出来ないのだ。

「では、ザイン。今ギャロバルにはどれほどの人数がいるのだ」

リズバロルは逸る心を抑えながらザインに聞いた。

「はあ、今すぐには何とも」

ザインは、おどおどと汗を拭きつつ、肯とも否ともつかぬ曖昧な返事をよこすばかりだ。

「では王都から我が兵を率いて参ったらどうだ」

次にリズバロルは荒々しくヒュームに問うた。ヒュームは今すぐにも集落を押さえようとするリズバロルの意図を察してか、困惑したように声を落とした。

「どんなに急いだとしても、五日はかかるでしょう」

「そんなに待っていていられるか！ 王都を騒がし、私を襲い、我がギャロバルに仇為そうとする者の居場所が知れたというのに、どういうことだ、これは」

リズバロルは机に拳を叩きつけた。

「リズバロル様。出立にも準備というものがございます。今はザイン殿の手の者で集落を囲み、しかるのちに老人を押さえるのがよろしかろう。我々の力だけでは多勢に無勢、到底敵いはしません」

「そんな事は分かっている。だが、その手の者が足りるかどうから分らないではないか」

リズバロルは横目で隣に座る貴人を見た。

ウェルはいつものようにあるかないかのわずかな笑みを口元に浮かべ、黙って話を聞いている。恐れるでなく、慌てるでなく、落ち着いて座っているのだ。

リズバロルは見ているだけでも腹が立った。

「ウエル、とやら。貴方はどうなのだ。その力で以って、何とかならぬのか」

「なりません」

リズバロルは怒りを通り越して、驚き、息を思わず止めていた。

たった一言ではあったが、ゆつたりとした口調には、焦りもない。

「相手の出方を、待ってはみませんか」

「待つ？」

「そうです」

そこで初めてウエルはリズバロルを見た。

「まだ、分からないことが沢山あります。あちらには私の仲間も残っていますから。後で連絡を取ってみます」

「連絡？」

ウエルは返答のかわりに笑顔を返した。

その笑顔が、リズバロルの頭にのぼっていた血をおさめかけた時であつた。

王都よりやってきた使者がすぐにでもリズバロルに会いたいと言っている、従者が告げた。

通された使者は、簡単にリズバロルに礼を尽くした後、あがつた息を整えつつ、こう言ったのだ。

「今朝方、リズバロル様の御内室様が」

「フェアリルがどうかしたのか？」

リズバロルの背に冷たいものがはしった。

今王都では、高貴な女達は何人も行方知れずになっている。

膝を突いた使者は、恐々と頭を上げた。その青ざめた顔が、全てを物語っているようにリズバロルには思われた。

「まさか　！」

リズバロルは立ち上がって、使者のもとに駆け寄った。使者の襟首を鷲？みにして、引き寄せる。リズバロルの後に、ヒュームも席を立った。

「今朝方、御内室様のお姿がどこにもなく……その御連絡に、と」

「しまった！」

リズバロルは使者を突き放すようにして踵を返し、みなで囲んでいた机に戻った。机に手をつき、うな垂れながら、力のない声で咳く。

「やられた！ 私としたことが！ あれだけ警護を増やしたというのに、まだ足りなかったか！」

「リズバロル様……」

ヒュームの気遣うような声も、リズバロルには届きはしなかった。
「ヒューム殿、そのお方は？」

ウエルが力を落とすリズバロルを見やりながら聞いてきた。

「リズバロル様の奥方様です。ただ」

「なにか？」

ヒュームはウエルの顔を真っ直ぐに見ていた。

暫し、間をおき、続きの言葉を紡いだ。

「フェアリル様は、現バスジル公王の第一公女、つまり、アキロの姫君なのです」

「アキロ、の？」

ウエルが珍しく柳眉を寄せ、表情を変えた。驚きとも、怒りとも、悲しみとも取れるウエルの表情を、リズバロルはそっと覗き込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2107e/>

幻妖帝国～アキロの章・紅き涙は迷霧の彼方

2010年10月9日04時22分発行